

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第94集

お か じ ま
岡 島 遺 跡 Ⅲ
お お け い け だ
大 毛 池 田 遺 跡 Ⅱ

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県西尾市は、愛知県中央部を流れる矢作川下流域の左岸に位置し、現在でも緑濃い丘陵地と矢作川などによって形成された沖積平野が広がっています。

一方、愛知県一宮市及び葉栗郡木曾川町周辺は、愛知県北西部の県境となる木曾川中流域左岸に位置し、木曾川などによって形成された沖積平野が広がっています。

この両地では、太古の昔から我々の祖先による多くの足跡が刻まれてまいりました。特に、小規模な河川を含んだ地形は、豊かな動植物の生態系を生み、またこの地形を利用して、古くから農耕生産活動が活発に営まれてまいりました。

平成10年、西尾市江原町では、愛知県土木部によって県道蒲郡碧南線の歩道が建設されることとなりました。この工事予定地には、弥生時代の集落遺跡としては西三河地区有数の規模を持つ、岡島遺跡があります。

平成8・9年、一宮市大字大毛地内では、愛知県土木部によって県道萩原三条北方線が建設されることとなりました。この工事予定地には、古墳時代～古代～中世を中心とした複合遺跡である、大毛池田遺跡があります。

財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）では、愛知県教育委員会を通じて愛知県土木部からの委託を受け、建設工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、多くの遺構、遺物を検出することができ、この地域の歴史に新たな資料を提供できることとなりました。

調査にあたりましては、愛知県土木部、愛知県教育委員会、西尾市教育委員会、一宮市教育委員会、木曾川町教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺住民の皆様から多大のご協力をいただきましたことに、深く感謝申し上げます。最後に本書が地域史の理解、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成13年 8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮泰啓

岡島遺跡 Ⅲ



SD104出土 台付無頸壺

例 言

1. 本編は愛知県西尾市江原・岡島町地内に所在する、岡島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、愛知県土木部による「県道蒲郡碧南線」歩道建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて愛知県土木部からの委託を受けて実施した。調査面積は1000 m²である。
3. 発掘調査は平成10年6月から9月にかけて実施した。さらに平成12年度には、調査報告書作成のため整理作業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、多くの作業員の方々の参加を得て、本センター木下 一(主査・現鶴城中学校)、松田 訓(調査研究員・現主任)が担当した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課(当時)、愛知県土木部道路建設課、愛知県埋蔵文化財調査センター、西尾市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本編の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下のとおりである。
第V章=石黒立人(本センター主査)、第VI章=鬼頭 剛・小野映介(本センター調査研究員・名古屋大学大学院学生)、その他を松田が執筆した。
なお、本編掲載の遺構写真は松田が撮影し、遺物写真は深川 進氏に撮影を依頼した。
7. 遺物整理作業については松田が担当し、次の方々の協力を得た。
実測・トレース 土倉崇子(調査研究補助員)
伊藤 恵 奥本真由美 妹尾美佐穂 真崎千恵子(整理補助員)
8. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準(T.P.)の数値である。
9. 土層についての色彩表現及び記号は、財団法人日本色彩研究所『標準土色帖』に依拠する。
10. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として添付CD中に示した。
11. 調査記録は本センターにて保管する。
12. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
13. 本書の執筆にあたり鈴木とよ江氏には、出土遺物の時期的解釈において多くの指導を得た。さらに本遺跡の調査・報告にあたって、つぎの諸氏、諸機関にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。(五十音順、敬称略)
伊藤 実 大橋正明 尾多賀晴悟 立松 宏 松井直樹 森 泰通 山崎純男
新市町立歴史民俗資料館 西尾市教育委員会

目 次

第 I 章 調査の経緯

- 第 1 節 調査に至る経過 (松田) 1
- 第 2 節 調査の経過 (松田) 1

第 II 章 遺跡の立地と環境

- 第 1 節 遺跡の位置 (松田) 2
- 第 2 節 歴史的環境 (松田) 4

第 III 章 調査の概要

- 第 1 節 調査区 (松田) 6
- 第 2 節 調査の方法 (松田) 6

第 IV 章 遺構

- 第 1 節 基本層序 (松田) 7
- 第 2 節 遺構
 - 第 1 項 下層遺構 (松田) 9
 - 第 2 項 上層遺構 (松田) 21

第 V 章 遺物

- 第 1 節 出土遺物 (石黒) 22
- 第 2 節 岡島遺跡出土土器に関する若干のコメント (石黒) 36

第 VI 章 自然科学分析 (鬼頭・小野) 39

第 VII 章 まとめ (松田) 45

挿 図 目 次

第1図	愛知県位置図	2	第27図	S D 116出土遺物実測図	33
第2図	西尾市位置図	2	第28図	S U 101・S X 103出土遺物実測図	34
第3図	遺跡周辺地形図	3	第29図	S K 115・133・137・S D 103・116 ・S X 103・105・南壁トレンチ 出土遺物実測図	35
第4図	周辺遺跡位置図	5	第30図	瓜郷式と関係する土器	37
第5図	調査区位置図	6	第31図	瓜郷式と無関係、もしくは一見無関係 のように見える土器	38
第6図	基本層序概念図	7	第32図	尾張出土の瓜郷式壺と、 尾張系を模倣した壺	38
第7図	調査区壁土層断面図	8	第33図	矢作川沖積底地周辺地域の地質図	40
第8図	調査区遺構全体図	10	第34図	ボーリング・コアの層序と層相	41
第9図	A遺構群平面図	12	第35図	深堀層序および放射性炭素年代	41
第10図	S K 101・102遺物出土状態 および断面図	14	第36図	ボーリング・コアの 珪藻ダイアグラム	42
第11図	S K 105遺物出土状態および断面図	14	第37図	岡島遺跡地点の堆積環境と 堆積シークエンス	43
第12図	S K 142遺物出土状態および断面図	15	第38図	旧河道・方形周溝墓想定図	46
第13図	S K 114・115・S D 102・104・108 ・110断面図	15	第39図	岡島遺跡調査地点位置図	48
第14図	S D 104遺物出土状態図	16			
第15図	S U 101遺物出土状態図	16			
第16図	B遺構群平面図	17			
第17図	C遺構群平面図	19			
第18図	S D 01出土遺物	21			
第19図	S K 101出土遺物実測図	25			
第20図	S K 102・105・123・133 出土遺物実測図	26			
第21図	S K 133・137出土遺物実測図	27			
第22図	S K 138・142・143・S D 101・102 ・103出土遺物実測図	28			
第23図	S D 103出土遺物実測図	29			
第24図	S D 104出土遺物実測図	30			
第25図	S D 104出土遺物実測図	31			
第26図	S D 116出土遺物実測図	32			

表 目 次

第1表	調査工程	1
第2表	層序区分	40

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経過

岡島遺跡は、愛知県遺跡分布地図に集落跡として記載された遺跡(遺跡番号 55074)で、西尾市岡島町・江原町地内に所在する。この記載範囲内に愛知県土木部(現建設部)道路建設課によって、県道蒲郡碧南線歩道建設工事が行われることとなった。この地はすでに(財)愛知県埋蔵文化財センターおよび西尾市教育委員会が、道路建設事業などに先立ち発掘調査を、数次にわたって行っており、弥生時代を中心とした多数の遺構、遺物の検出がなされ、西三河地区でも有数の規模を有する集落遺跡として認知された。これらの調査時に確認された遺跡範囲内に、歩道建設予定地が入っていたため、事前に発掘調査が必要と判断された。

(財)愛知県埋蔵文化財センター(当時)では、このような事前協議を経て、愛知県土木部(現建設部)から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 10 年 6 月より発掘調査を実施した。調査面積は 1000 m²である。

第 2 節 調査の経過

調査区は県道の南側の拡幅予定地を、一括して設定した。この調査区に平成 10 年 6 月 4 日から表土剥ぎを実施し、資材搬入を行い、発掘作業を開始したのは 6 月 11 日であった。調査地には 80 ～ 200 cm という予想以上の厚さで客土が堆積しており、こうした二次堆積層の掘り下げに時間を要した。調査期間は 4 ヶ月弱を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて 9 月 30 日に現地調査を終了した。

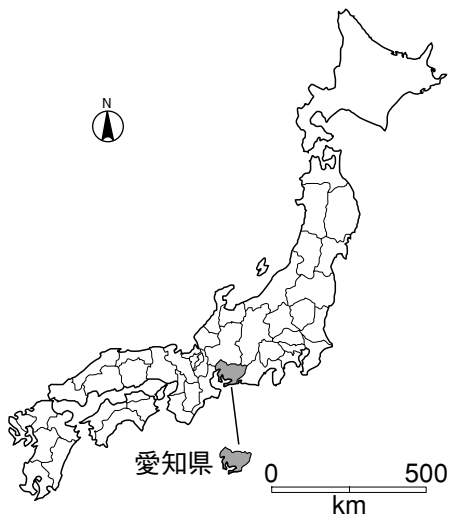
出土遺物の整理作業は、調査終了後洗浄、注記作業を本センター安城事務所で行い、引き続き平成 12 年 10 月より同豊田事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

第 1 表 調査工程

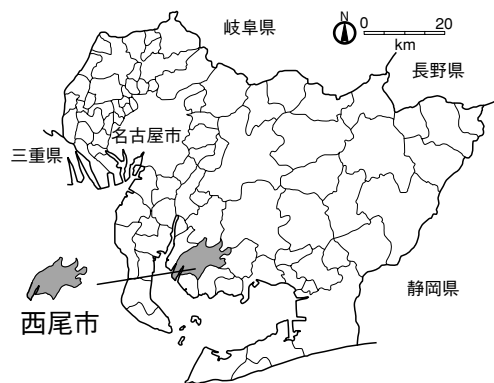
	平成10年						平成12年			平成13年		
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
作業員説明会	○											
資材搬入		○										
表土剥ぎ		○										
発掘調査		○				○						
航空測量					○							
補足調査					○							
資材等撤収						○						
基礎整理		○										
報告書作成							○					○

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 愛知県位置図



第2図 西尾市位置図

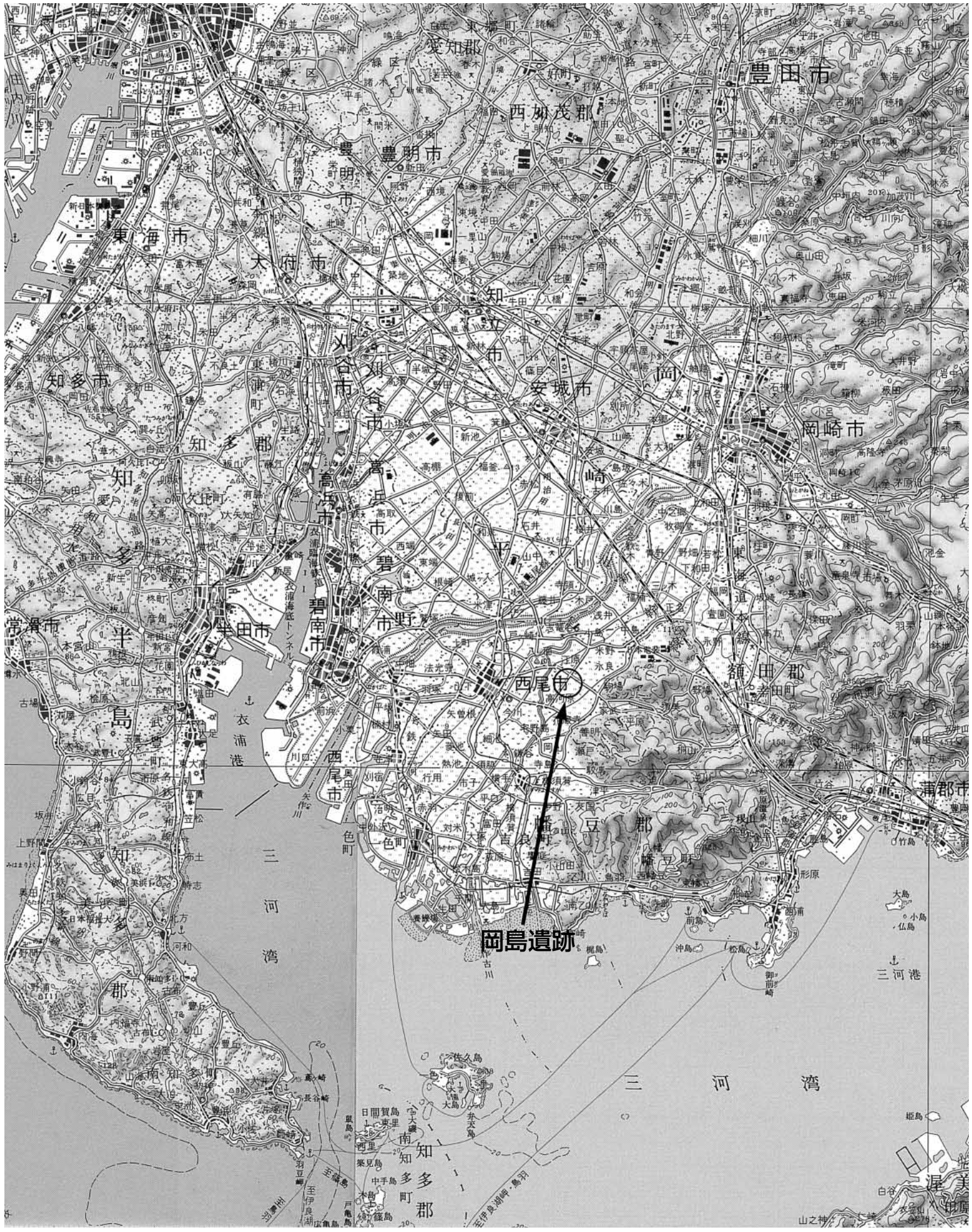
愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。岡島遺跡の所在する西尾市は、愛知県の中央部、矢作川下流域左岸に属し、その東境は額田郡幸田町、南境では幡豆郡一色町・吉良町、西境は矢作川対岸の碧南市、北境は安城市・岡崎市と接する。

遺跡の所在する西尾市域の地形は、東部山地を除くと大きく洪積台地と沖積低地に分かれる。市内の西部には、碧海台地と呼ばれる洪積台地が広がり、西尾城とその城下町から発達した旧市街地は、この台地上に立地する。一方、矢作川流域に所在する西三河南部の平野は、矢作古川によって形成された沖積低地で、西尾市域では南東部がこれにあたり、上流部より放射状に複数の自然堤防が走る砂質氾濫原によって構成され、岡島遺跡の所在する江原・岡島地区周辺も、こうした自然環境上に立地する。

調査地点は矢作古川が右岸の八ツ面山裾に当たって大きく蛇行する内側（左岸）に発達した砂質氾濫原上に立地し、周辺には安藤川・広田川といった支流が矢作古川に向かって流れ落ちている。岡島遺跡はこの両支流に挟まれた位置に、西三河地区では有数の規模を有する弥生集落として、確認された遺跡である。この地は西尾市の中では沖積低地に位置するため標高が低く、調査地は現地表高約 6.3 メートルを測り、遺構検出面は標高 4 メートル前後である。調査地点周辺は、果樹園及び水田が広がる。

参考文献

西尾市史編纂委員会編 1973 『西尾市史 一』 愛知県西尾市



第3図 遺跡周辺地形図（国土地理院1/20万地勢図『豊橋』）

第2節 歴史的環境

岡島遺跡は、弥生時代を主体とする遺跡である。『愛知県遺跡分布地図（Ⅱ）—知多・西三河—』によれば、西尾市内に分布する弥生時代の遺跡は、28ヶ所が確認されている。加えて、近隣の矢作川流域及び丘陵部には、地域によって分布調査の粗密はあるが、数多くの遺跡が分布している。本節では、西尾市域における各時代の遺跡について概観してみる。

旧石器時代の遺跡はいまだ発見されてはいないが、中畑の清水貝塚では縄文時代晩期以降の遺物層中に、混入品として有舌尖頭器が検出されている。

縄文時代の遺物が出土する遺跡は、清水貝塚以外にも台地上の各所で認められる。しかし、これらの地点では、中期～晩期の土器が含まれていること以外確認の域を出ないものがほとんどで、遺跡の性格が解明できる内容にまで至っていない。本センターが平成1年度に調査を行った清水遺跡は、清水貝塚隣接地であるが、包含層中から縄文時代早期末～前期初頭の土器片を検出しており、発掘調査による西尾市域最古の遺跡である。

弥生時代に至ると、西尾市域では台地上だけでなく、岡島遺跡のように沖積低地にも人々の足跡が刻まれるようになる。北部九州に端を発した遠賀川式土器文化は、弥生時代前期のうちに面的な広がりを尾張地域にまで拡大する。弥生時代前期の土器は、尾張地域以東に波及しなかったわけではないが、出土状況はいずれも面的な分布とは捉えられず、点在の域を出ない。西尾市域周辺においても、岡島遺跡から北へ約7kmの矢作川右岸において、遠賀川系と思われる土器がわずかに確認されている。この地点は現在の安城市で、碧海台地東側縁辺部にあたり、当該期に西尾市域との交流も充分考えられるため、今後この時期の資料も確認される可能性が考えられる。弥生時代中期～後期には、八ツ面山裾から南西側に続く台地上で、人々の活発な生活が営まれたようである。新御堂貝塚、熊子山遺跡、松崎八反田遺跡などは、隣接する分布状況、立地環境の類似性などから、それぞれ独立した遺跡というよりも、この地点に展開した一連の遺跡として捉えられよう。一方、沖積低地においては、岡島遺跡や、この広田川対岸に位置する毘沙門遺跡が、微高地上を中心として展開するようになる。

古墳時代の西尾市域では、多様な鉄製品が出土した五砂山古墳、円筒・形象埴輪片が多数確認されている西山古墳など、5世紀代の築造と思われるものを最古として、後期の群集墳に至るまで多数の古墳が確認されている。集落遺跡としては、岡島遺跡の北西約2.5kmの位置に古墳時代～古代にかけての集落が検出された志貴野遺跡がある。

古代から中世にかけての集落跡としては、八ツ面山北部遺跡が確認されている。

参考文献

愛知県教育委員会編 1988 『愛知県遺跡分布地図(Ⅱ)』 愛知県教育委員会

西尾市史編纂委員会編 1973 『西尾市史 一』 愛知県西尾市



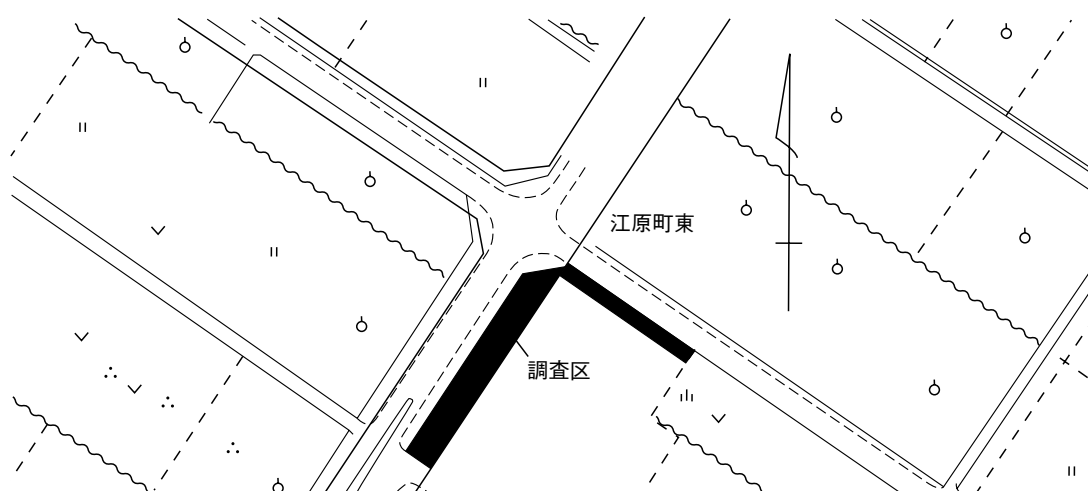
- | | |
|-------------|---------------|
| 1 = 岡島遺跡 | 7 = 毘沙門遺跡 |
| 2 = 清水貝塚 | 8 = 五砂山古墳 |
| 3 = 清水遺跡 | 9 = 西山古墳 |
| 4 = 新御堂貝塚 | 10 = 志貴野遺跡 |
| 5 = 熊子山遺跡 | 11 = 八ッ面山北部遺跡 |
| 6 = 松崎八反田遺跡 | |

第4図 周辺遺跡位置図（国土地理院1/5万地形図「岡崎」部分）

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査区

岡島遺跡は、本調査に先立って行われた確認調査および、数次にわたる近隣調査の結果から、江原町交差点より南側にのびる歩道建設予定地だけでなく、交差点より東側にのびる歩道建設予定地においても遺構が展開している可能性が考えられた。したがって 98 年度調査区は、交差点を起点として南・東方向へ L 字状に設定した。調査区は、歩道建設予定部分であったため、幅が狭く、検出面の深さがより強調された形となった。



第5図 調査区位置図

第2節 調査の方法

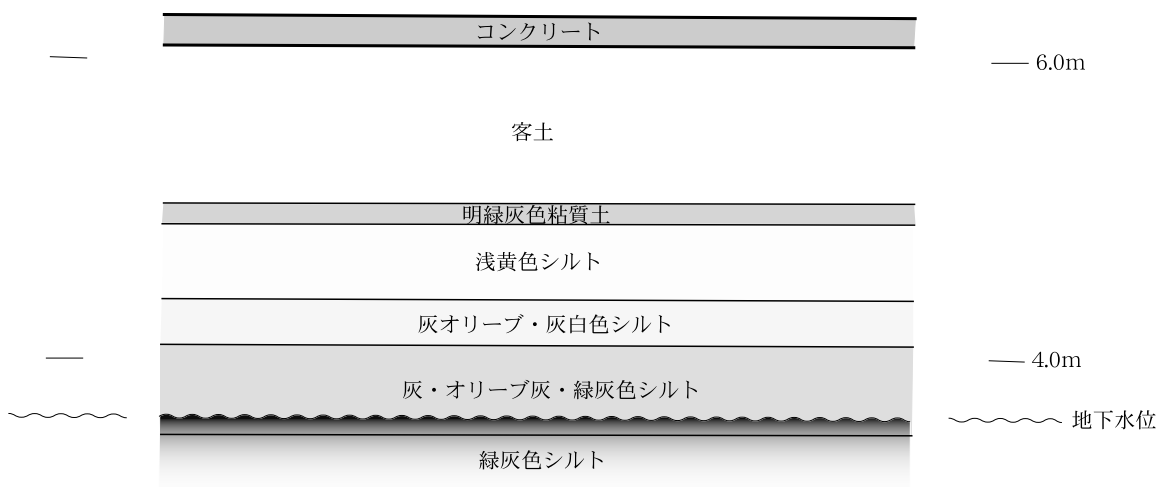
調査地点は沖積低地に立地し、過去の調査事例においても遺構検出面上位において地下水の湧出が認められた。したがって調査地点では、掘削作業に伴う湧水対策を施す必要があった。調査地点西側には果樹園が広がっていたため、ウェルポイントによる地下水汲み上げは不可能で、調査区の道路側にシートパイルを打ち込んだ後、調査に臨んだ。調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、排土置場として南北歩道予定地の東側に借地契約をし、これをまとめた。遺構検出作業は、これに先立ち約 50 cm 幅のトレンチを壁面に沿って入れ、主体となる弥生時代の文化面より上位で中世から近世にかけての遺構面が確認されたため、上位・下位 2 面で行った。下位面では、遺物包含層中の遺構観察が不可能であった。そこでこの遺物包含層を任意（約 10 cm）に分層し、実質的にはグリッド毎に検出作業を繰り返し、基盤層に到達した段階で遺構を確認する方法をとった。

第IV章 遺構

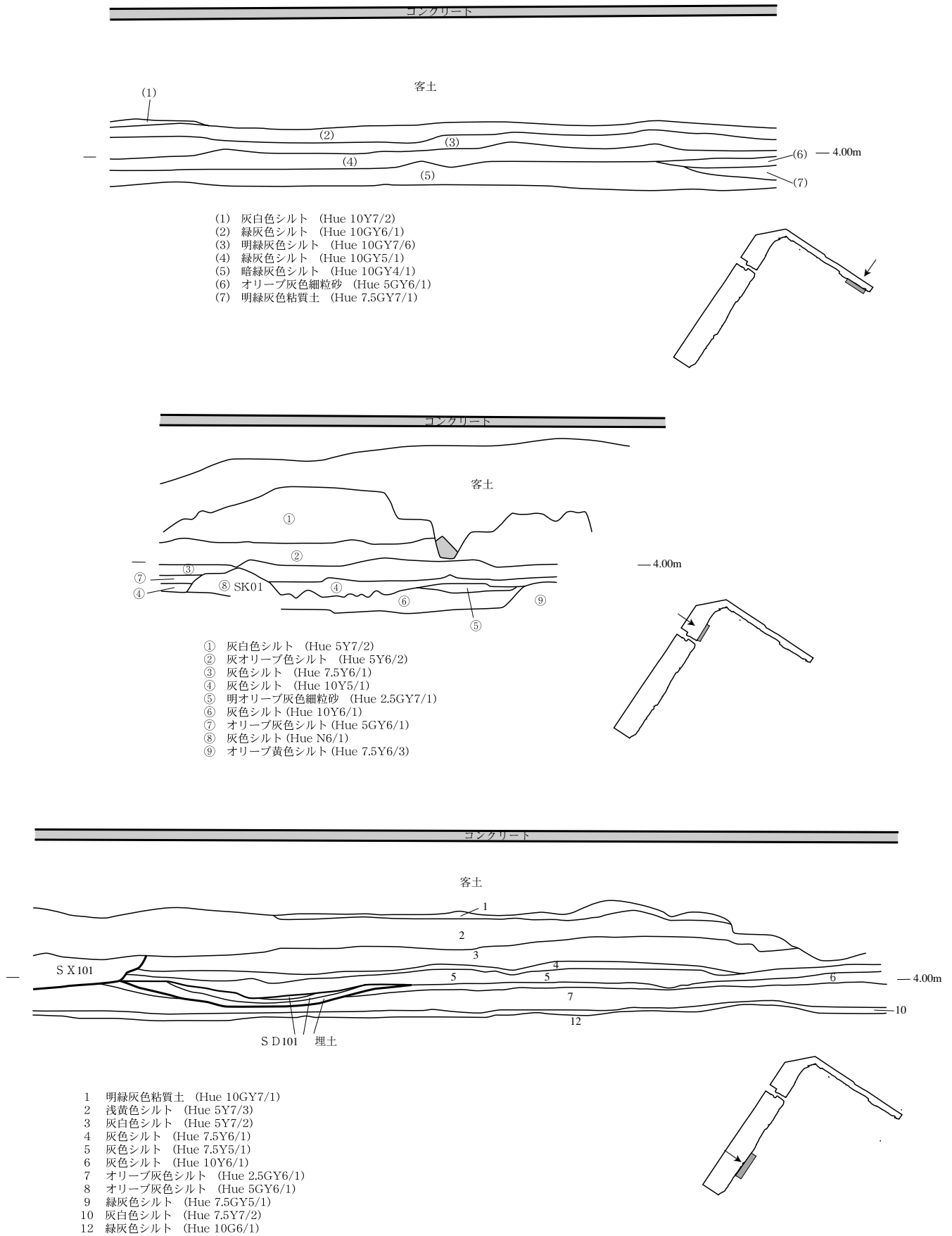
第1節 基本層序

岡島遺跡の基本層序を概観すると、第6図のような状況がみてとれる。地表面は標高6.3mで、地表直下には客土が0.9～1.7m盛られていて、または旧耕作土(第1層)である明緑灰色粘質土または、浅黄色シルトが15～40cmほど堆積していた。調査区全体を覆っているのはこの客土および旧耕作土のみであったため、表土除去作業はこれらの層の直下までとした。その下には灰オリーブ・灰白色シルトが堆積しており、近世以降の人為的掘り込みは、これらの層上位において確認できた。さらにその下においては部分的に灰色シルトが15～30cmほど堆積していたが、人為的な掘り込みや遺物は認められず文化面は認定し得なかった。この下には灰色・オリーブ灰色・緑灰色シルトが部分的に10～30cmの厚さで堆積していた。このシルト層には、弥生時代中期を主体とした遺物が含まれており、本遺跡の遺物包含層にあたる。このシルト層の下には、緑灰色シルト層がさらに堆積しているのが確認でき、トレンチにおいて少ないながら弥生時代中期の遺物も検出できた。しかし、発掘期間中には、湧水層がこの緑灰色シルト層直上に位置したため、隣接する果樹園に配慮したシートパイルでは湧水を留めることができず、トレンチおよび埋め戻し前の機械掘削での確認のみに終わった。

古墳時代中期以降～中世にかけて、遺物・遺構がほとんど確認できないのは、近世またはその直前に、土地改良などによって開削された可能性もうかがえる。弥生時代中期を主体とした遺物包含層は、部分的にはさらに細別が可能であるが、調査地全体で共通するまでの堆積状況ではなかったため、この時期の遺構検出は灰色シルト層中において行った。



第6図 基本層序概念図



第7図 調査区壁土層断面図 (1/80)

第2節 遺構

今回の調査区で検出できた遺構は、主として土坑 52 基、杭列 1 条、溝 19 条、不定形土坑 8 基である。このうち土坑では、土器棺墓の可能性が考えられるもの、溝では方形にめぐるものなどが認められたが、生活に直接結びつく住居跡等は残念ながら検出できなかった。方形にめぐる溝については、当該期の墓制に伴う性格も考えられるが、主体部未検出、深度の脆弱さ等から、あえて方形周溝墓とは限定せず、可能性を有する溝として捉えた。

これらの検出遺構は、同一時期に形成されたものではなく、上下 2 層に大きく分かれる上層は遺構の密度も薄く、遺物もほとんど出土していないが、少ない資料から判断すると近世をさかのぼることはないようである。この面の遺構は、基本層序の説明でも触れたが灰オリーブ・灰白色シルト層を掘り込んでいる。下層は上層と比較して遺構の密度が濃く遺構に伴う遺物も複数捉えられたため、遺構の時期が弥生時代中期後葉～末を主体とし、その前後した時期が客体的に混じることが確認できた。

以下には、今回の調査によって検出した主要遺構について、下層、上層の順に内容を説明する。

第1項 下層遺構

岡島遺跡の下層は、弥生時代中期～古墳時代中期の遺構が調査区のほぼ全域にわたって検出された。その内訳は、土坑 41 基、溝 16 条、不定形土坑他 7 基である。出土遺物から遺構の時期を判断すると、主体が弥生時代中期後葉～末に位置づけられると思われる。これらの遺構は、調査区の各部で、検出される状況に違いが見られる。

調査区南部の最も広く開けた部分では、幅 3 m 前後の浅い溝が主体となり、小規模な土坑が散在する(以下 **A 遺構群**)。

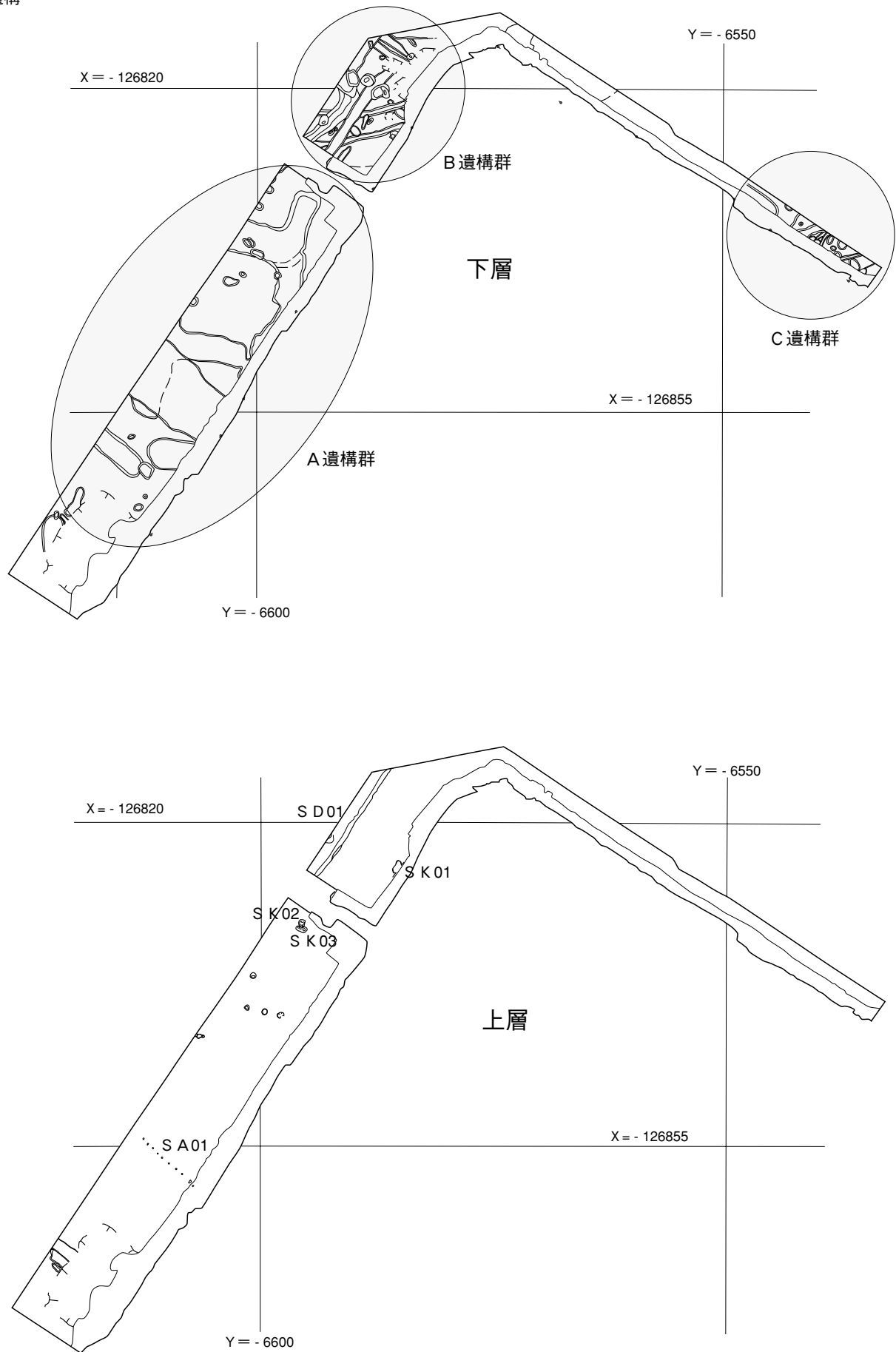
調査区北角部は、蛇行する自然流路が通る部分である。この部分では、南西部の溝に比べて小規模な 0.5 ～ 1.6 m ほどの溝が密集し、小規模な土坑が溝と複雑に切り合う。これらの遺構は、自然流路が埋没した後、掘削されたと思われる(以下 **B 遺構群**)。

調査区東部は、小規模な土坑と溝が調査区の東端において集中して検出されたが、自然流路に近い部分では未検出であった(以下 **C 遺構群**)。

以下に、大きく 3 グループに分けられる遺構群を、グループ別に、主要な遺構の種ごとに説明する。

1 A 遺構群

S K 101 調査区南側東壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.81 m を測る。平面形態は、楕円形を呈する。長径 0.98 m、短径 0.72 m、深さ 0.16 m を測る。埋土はオリーブ灰色シルトを



第8図 調査区遺構全体図 (1/600)

基調とし、2個体と思われる壺片が破砕状態で出土する。この壺片はどちらも底部が見られず、口縁部が土坑の下端から浮いた位置で出土しており、逆位置で据えられた土器棺墓の可能性もうかがえる。北東方向に1 m弱の位置に、同様に土器片が多数含まれたS K 102が並ぶ。出土した壺片から、弥生時代中期末～後期初頭のものと思われる。

S K 102 調査区南側東壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.84 mを測る。平面形態は、不整形円形を呈する。直径 0.4 m、深さ 0.1 mを測る。埋土はオリーブ灰色シルトを基調とし、1個体と思われる壺片が破砕状態で出土する。頸部以上が欠損した壺は、下端近くで底部以上が正位置で出土しており、壺を棺身とした土器棺墓の可能性がうかがえる。北東方向に1 m弱の位置に、同様に土器片が多数含まれたS K 101が並ぶ。出土した壺片から、弥生時代中期末～後期のものと思われる。

S K 103 調査区南側東壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.92 mを測る。平面形態は、不整形方形を呈する。長径 1.4 m、短径 1.7 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は緑灰色シルトを基調とし、S D 105を切っている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

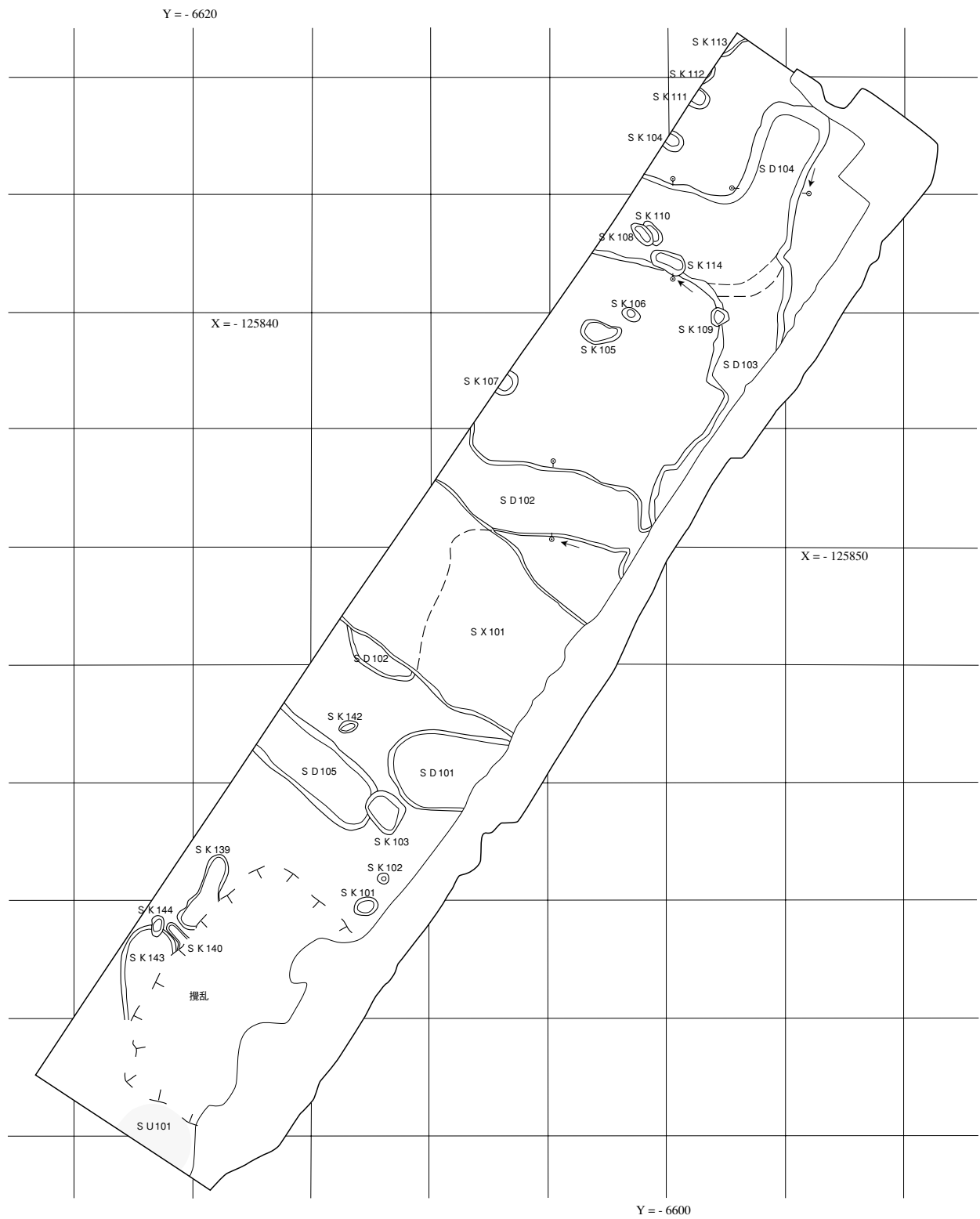
S K 105 調査区南側西壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.6 mを測る。平面形態は、不整形楕円形を呈する。長径 1.7 m、短径 1.1 m、深さ 0.11 mを測る。埋土はオリーブ灰色シルトを基調とし、高杯、壺、甕の破片が出土する。出土した土器の形態的特徴から、弥生時代中期末のものと思われる。

S K 142 調査区南側西壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.85 mを測る。平面形態は、楕円形を呈する。長径 0.78 m、短径 0.48 m、深さ 0.08 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、1個体と思われる壺・高杯の小片が破砕状態で出土する。南西方向約7 mの位置に、同様に土器片が多数含まれたS K 101・102が並ぶ。出土した高杯片から、弥生時代中期末のものと思われる。

S K 143 調査区南側西壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.8 mを測る。平面形態は、楕円形を呈する。残存する短径 2.3 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、S K 144に切られている。壺・鉢の小片が破砕状態で出土する。出土した壺片から、弥生時代中期後葉のものと思われる。

S D 101 調査区南側東壁寄りに位置する溝。検出高は、標高 3.94 mを測る。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅 3.3 m、深さ 0.38 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、主軸は東西方向から大きく振らない。出土した壺片から、弥生時代中期後葉のものと思われる。

S D 102 調査区南側に位置する溝。検出高は、標高 3.7 mを測る。調査区を東西方向で横断したものが、西壁際においてL字またはT字状に90°方向を変えて南北方向にのび、S X 101に切られている。この溝の下端は、S X 101埋土よりも低位まで掘り込まれており、S D 101の西端と交差する手前で終わっている。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅 3.08 m、深さ 0.22 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、主軸は東西・南北方向から大きく振らない。わずかに含まれた壺片から、弥生時代中期後葉のものと思われる。

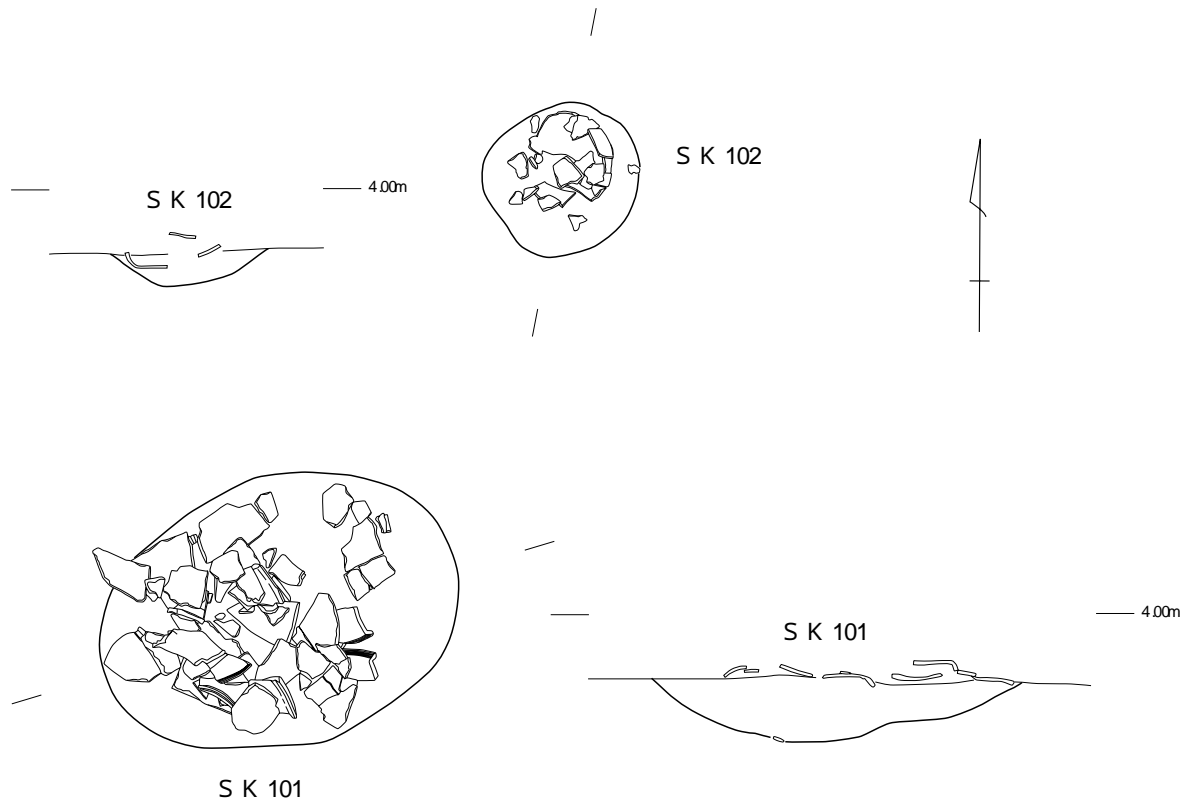


第9図 A遺構群平面図 (1/250)

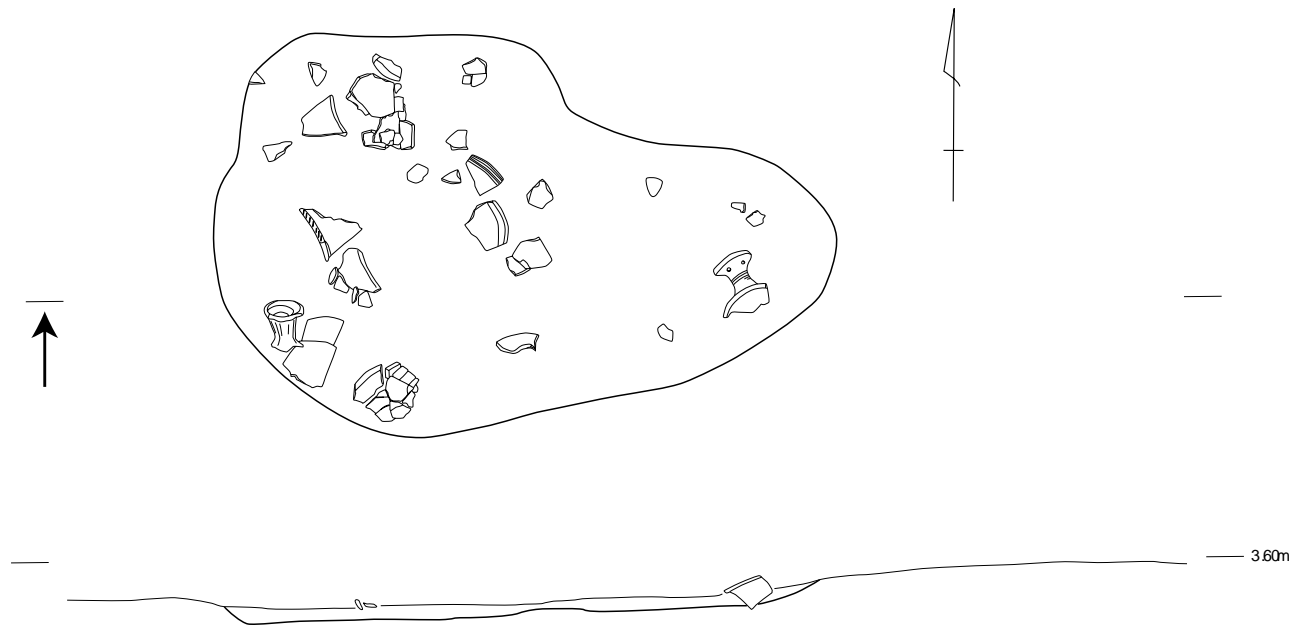
- S D 103** 調査区南側東壁寄りに位置する溝。検出高は、標高 3.6 m を測る。北側に位置する S D 104 との遺構の切り合い関係は、遺構検出面の段階では確認できなかったが、遺構の下端では S D 104 に切られていることが確認できた。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅 2.76 m、深さ 0.35 m を測る。埋土はオリーブ灰色シルトを基調とし、主軸は北向きで南北方向からわずかに東に振る。壺、甕、高杯片が、破碎した状態で出土する。出土した土器片の形態的特徴から、弥生時代中期後葉～中期末のものと思われる。
- S D 104** 調査区南側に位置する溝。検出高は、標高 3.5 m を測る。調査区を南北方向にのびたものが、L 字状に 90° 方向を変えて西壁以西まで東西方向にのび、S D 103 を切っている。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅は東西にのびる部分で 3.66 m、南北にのびる部分で 2.72 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は灰色シルトを基調とし、主軸は南北方向から北向きでやや東に振る。南北にのびる部分の北端では、壺、甕、高杯片が集中して出土する。出土した土器片の形態的特徴から、弥生時代中期末～後期のものと思われる。
- S D 105** 調査区南側東壁寄りに位置する溝。検出高は、標高 3.9 m を測る。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅 2.46 m、深さ 0.36 m を測る。埋土は灰色シルトを基調とし、主軸は北向きで南北方向から約 45° 西に振る。壺、甕の小片がわずかに含まれ、形態的特徴から弥生時代中期末のものと思われる。
- S X 101** 調査区南側に位置する浅い溝状遺構。検出高は、標高 4.0 m を測る。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅は中央部で 7.0 m、深さ 0.11 m を測る。埋土は灰色シルトを基調とし、S D 102 を切って調査区を横断する主軸は、北向きで南北方向から約 45° 西に振る。わずかに壺、甕の小片が出土し、形態的特徴から弥生時代中期後葉のものと思われる。
- S U 101** 調査区南端に位置する土器集積遺構である。検出高は、標高 3.8 m を測る。北側を攪乱、南側をシートパイル、東側を壁によって遮られているため、集中範囲の規模をうかがい得ない。集中する遺物を覆う埋土は灰色シルトで、検出面においての掘り込みは確認できず、壺を主体とした土器片が破碎した状態で検出された。出土した土器片の形態的特徴から、弥生時代中期末のものと思われる。

2 B 遺構群

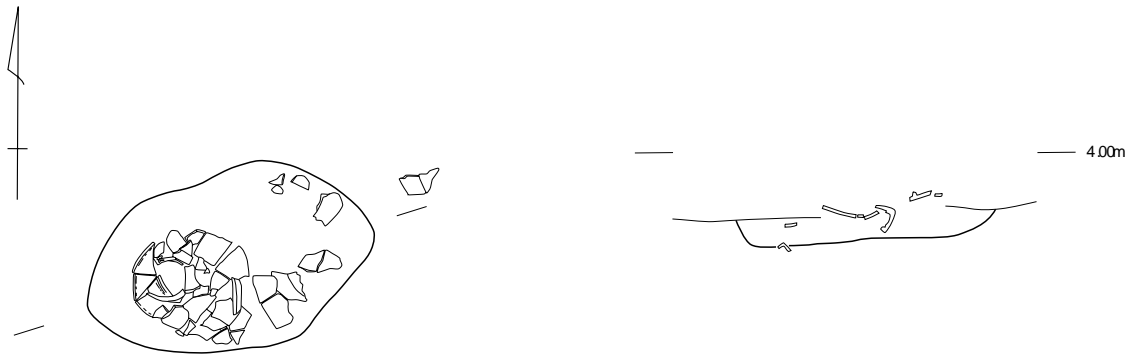
- S K 115** 調査区北側西壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.7 m を測る。平面形態は、不整楕円形を呈する。長径 1.36 m、短径 1.14 m、深さ 0.34 m を測る。埋土は緑灰色シルトを基調とし、S K 124・S D 108 を切っている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。
- S K 123** 調査区北側に位置する土坑。検出高は、標高 3.72 m を測る。平面形態は、楕円形を呈する。長径 1.22 m、短径 0.94 m、深さ 0.26 m を測る。埋土はオリーブ灰色シルトを基調とし、SD108 に切られ、S D 107 を切っている。古墳時代中期と思われる甕が 1 点出土している。
- S K 126** 調査区北側に位置する土坑。検出高は、標高 3.6 m を測る。平面形態は、不整楕円形を呈する。長径 2.06 m、短径 1.28 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は緑灰色極細粒砂を基調とし、



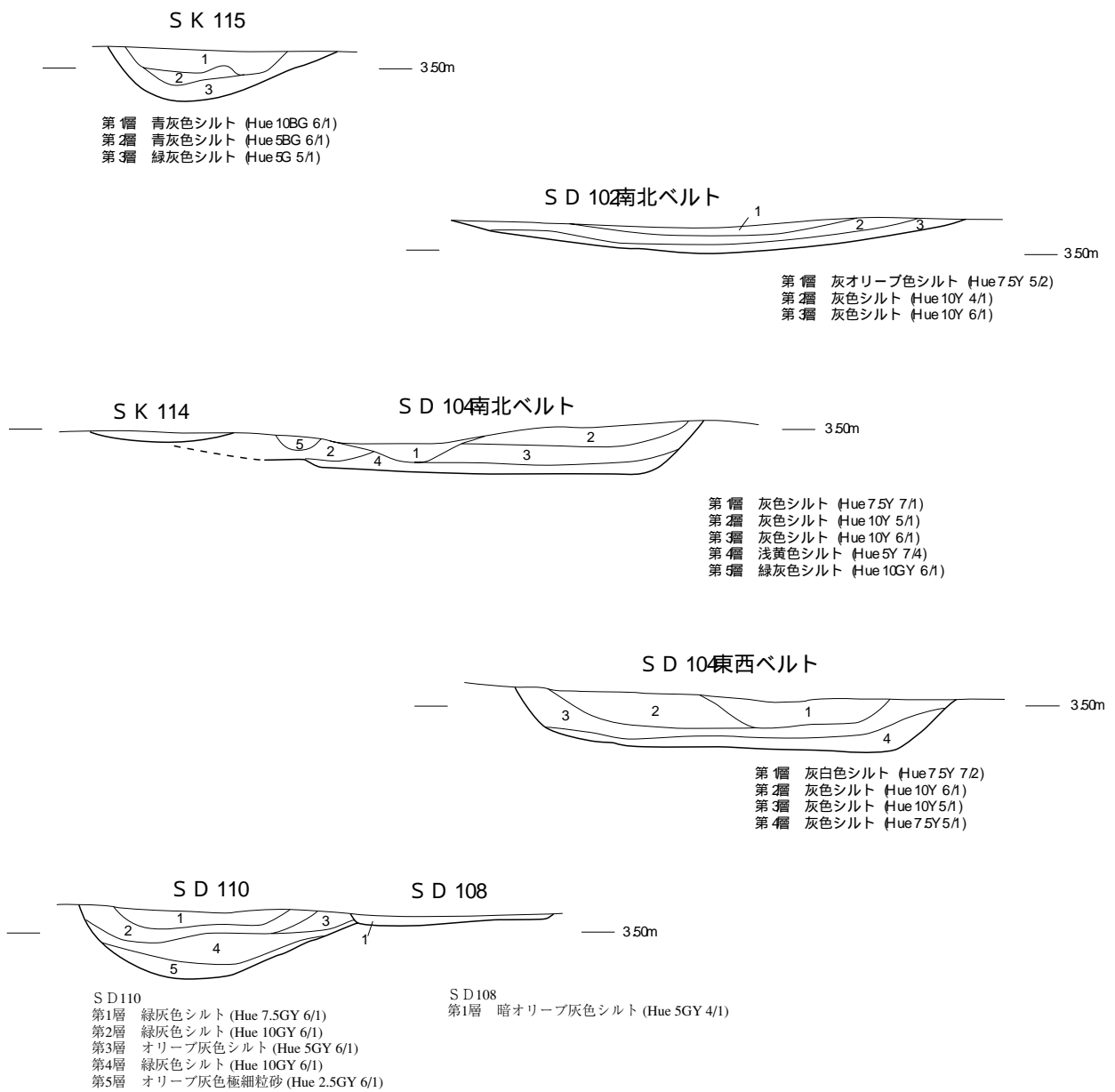
第10図 S K 101・102遺物出土状態および断面図 (1/20)



第11図 S K 105遺物出土状態および断面図 (1/20)



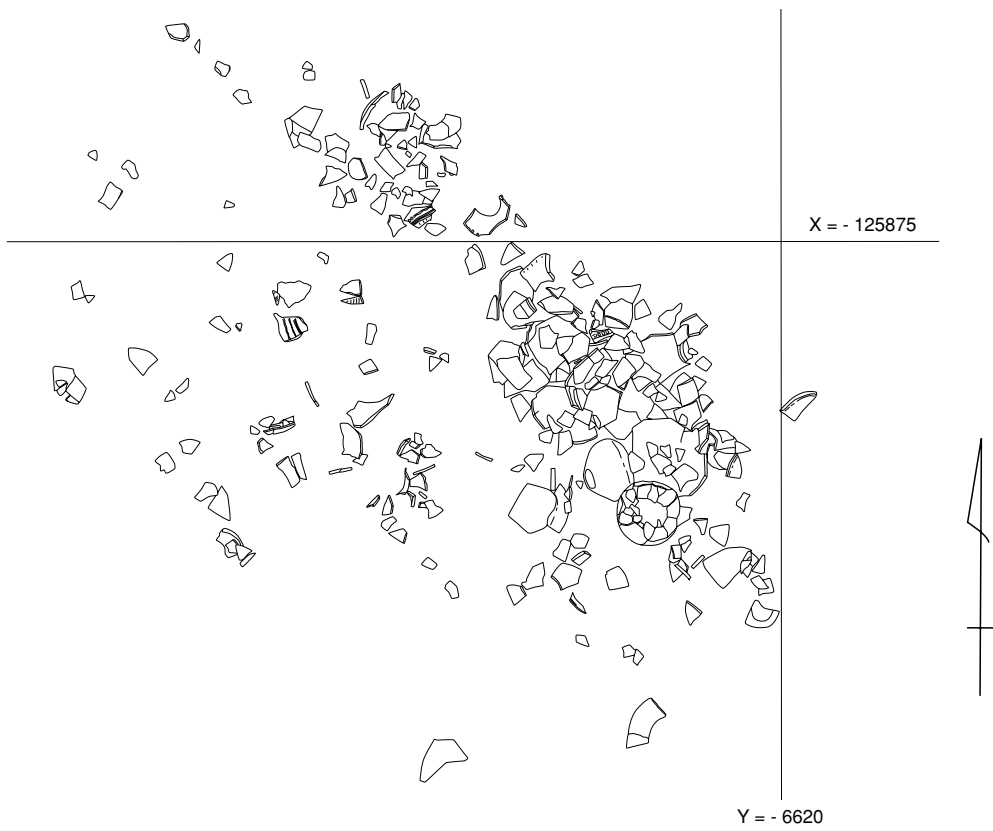
第12図 SK 142遺物出土状態および断面図 (1/20)



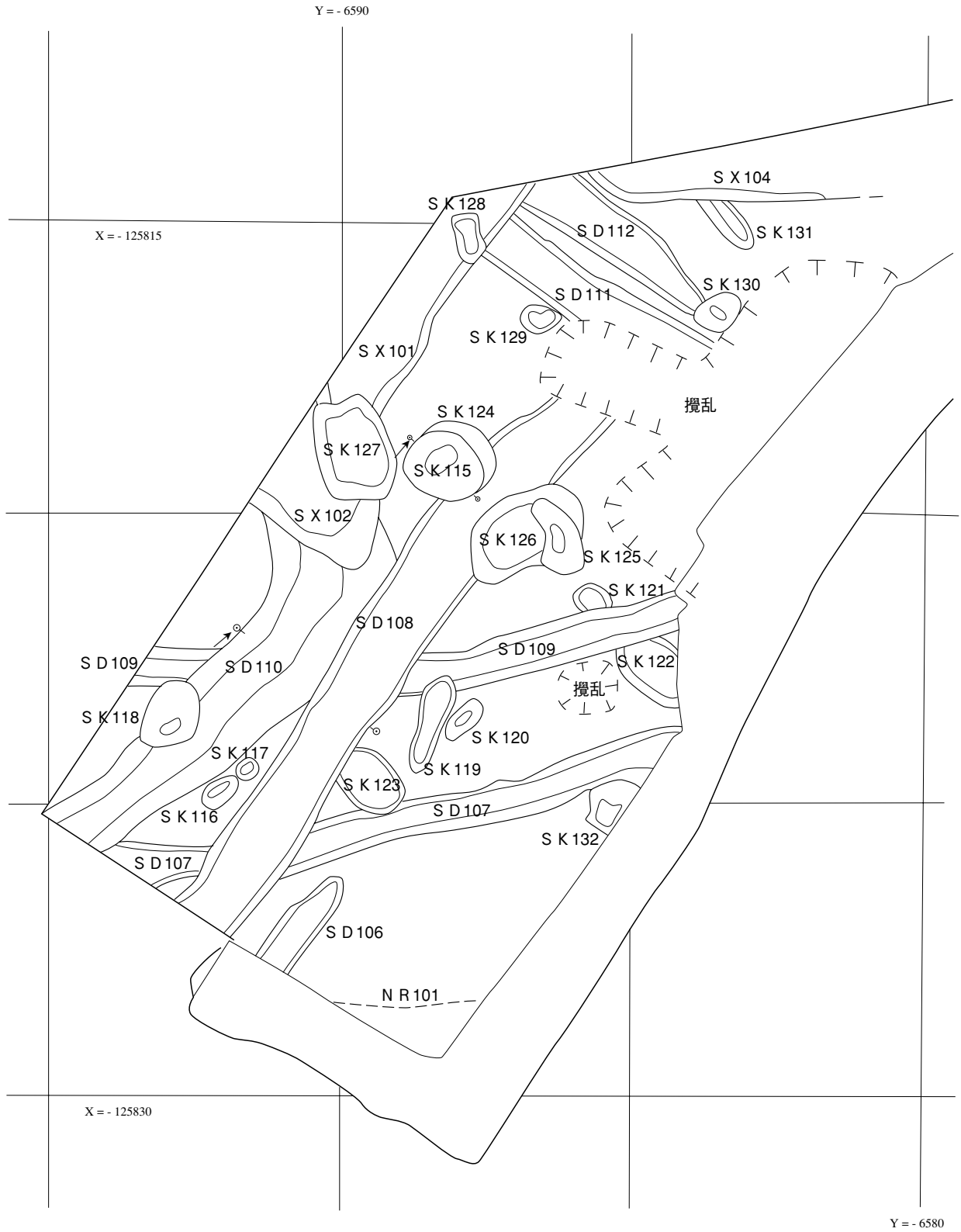
第13図 SK 114・115・SD 102・104・108・110断面図 (1/40)



第14図 SD104遺物出土状態図 (1/20)



第15図 SU101遺物出土状態図 (1/20)



第16図 B遺構群平面図 (1/100)

S K 125に切られ、S D 108を切っている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

S K 127 調査区北側西壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.7 mを測る。平面形態は、不整長方形を呈する。長径 1.82 m、短径 1.28 m、深さ 0.18 mを測る。埋土はオリーブ灰色極細粒砂を基調とし、S D 116・S X102を切っている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

S D 108 調査区北側に位置する浅い溝。検出高は、標高 3.7 mを測る。断面形態は、緩やかな船底形を呈する。幅 1.26 m、深さ 0.08 mを測る。埋土は暗オリーブ灰色シルトを基調とし、主軸はN - 33° - Eを示す。S K 123、S D 107・109・110を切っており、S K 115・126・127に切られている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

S D 109 調査区北側に位置する溝。検出高は、標高 3.6 mを測る。断面形態は、船底形を呈する。幅 0.74 m、深さ 0.18 mを測る。埋土は灰色極細粒砂を基調とし、主軸はN - 75° - Eを示し、北側を内にして緩やかに弧を描く。S K 121・122を切っており、S K 118・119、S D 108・110に切られている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

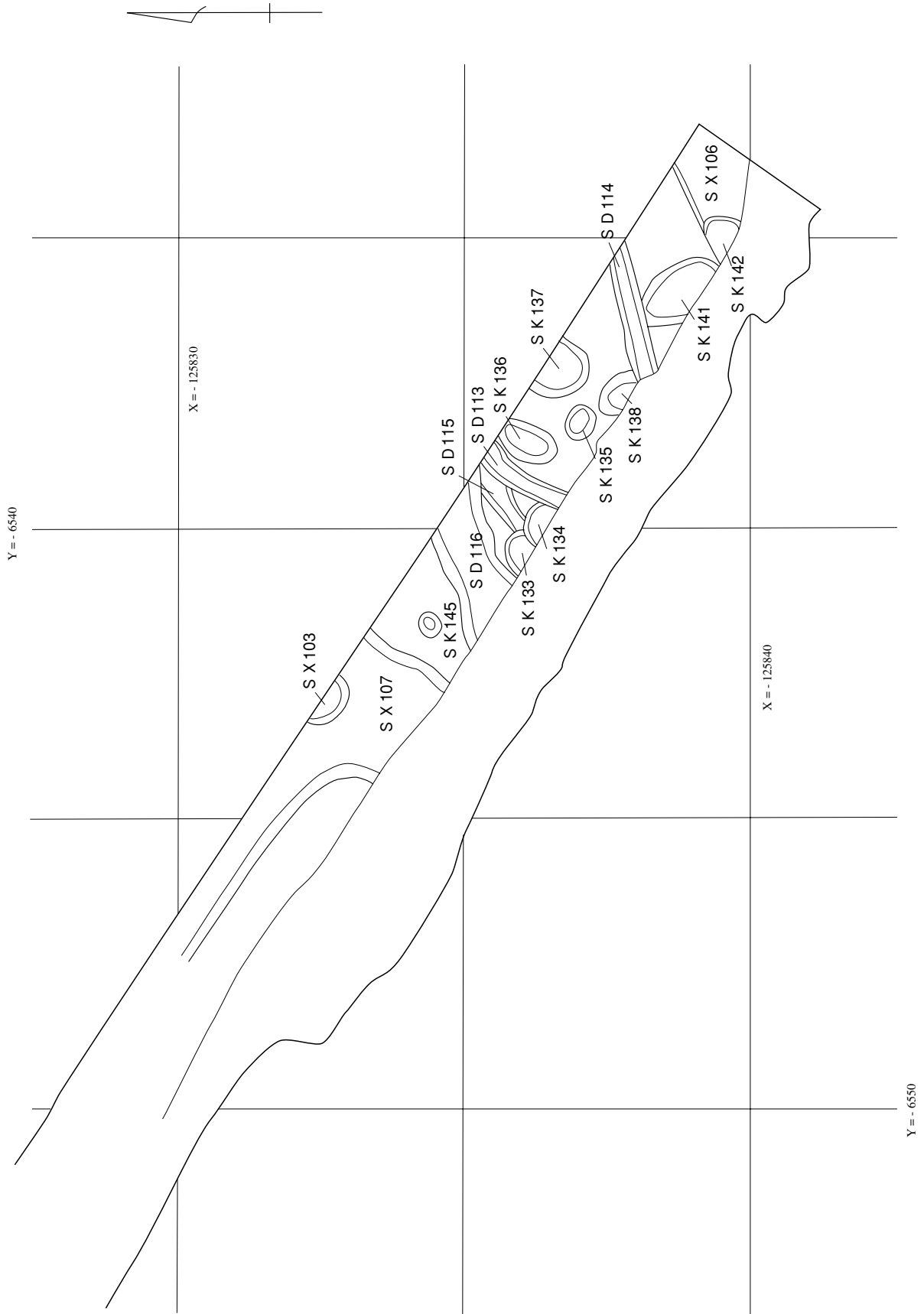
S D 110 調査区北側に位置する溝。検出高は、標高 3.7 mを測る。断面形態は、船底形を呈する。幅 1.65 m、深さ 0.42 mを測る。埋土は緑灰色シルトを基調とし、主軸はN - 45° - Eを示し、北端で北西方向に角度を変える。S D 109を切っており、S K 118、S D 108、S X 102に切られている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

S D 111 調査区北側に位置する溝。検出高は、標高 3.7 mを測る。断面形態は、船底形を呈する。幅 0.92 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は緑灰色シルトを基調とし、主軸はN - 53° - Wを示し、S D 116に切られている。北側には、S D 112がほぼ並行する。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。

N R 101 調査区北側に位置する埋没自然流路。流路の南肩にあたる落ち際をトレンチ掘削および、遺構検出作業時に確認した。地下水位が遺構検出面直下であったため、流路内の堆積状況は確認し得なかった。調査区北側のB遺構群は、全面がこの自然流路埋没後の掘り込みである。S K 123からは、古墳時代中期と思われる甕が出土しており、この自然流路は遅くともこの時期までに埋没したことがうかがえる。

3 C 遺構群

S K 133 調査区東側南壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.55 mを測る。平面形態は、楕円形を呈するものと思われ、残存径 0.76 m、深さ 0.05 mを測る。埋土は炭化物を含む緑灰色細粒砂を基調とし、S D 115を切っており、S K 134に切られている。壺、甕の破片が比較的まとまって出土しており、石庖丁片も1点含まれた。これらの形態的特徴から弥生時代中期中葉のものと思われる。



第17図 C遺構群平面図 (1/100)

- S K 136 調査区東側北壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.55 m を測る。平面形態は、不整楕円形を呈する。長径 1.1 m、短径 0.66 m、深さ 0.04 m を測る。埋土は緑灰色細粒砂を基調とする。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。
- S K 137 調査区東側北壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.57 m を測る。平面形態は、円または楕円形を呈するものと思われ、残存径 1.06 m、深さ 0.14 m を測る。埋土は緑灰色細粒砂を基調とする。壺の破片がわずかに含まれ、石鏃も 1 点含まれた。形態的特徴から弥生時代中期中葉のものと思われる。
- S K 138 調査区東側南壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.58 m を測る。平面形態は、楕円形を呈するものと思われ、残存径 0.84 m、深さ 0.04 m を測る。埋土は緑灰色細粒砂を基調とし、S D 114 に切られている。壺の破片がわずかに出土しており、形態的特徴から弥生時代中期後葉のものと思われる。
- S K 141 調査区東側南壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 3.53 m を測る。平面形態は、不整楕円形を呈するものと思われ、長径 1.18 m、短径 0.96 m、深さ 0.06 m を測る。埋土は緑灰色細粒砂を基調とする。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。
- S D 114 調査区東側に位置する溝。検出高は、標高 3.55 m を測る。断面形態は、船底形を呈する。幅 0.38 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は緑灰色シルトを基調とし、主軸は N - 75° - E を示し、S K 138 を切っている。土器片がわずかに含まれたが、時期を判定し得るものではなかった。
- S D 115 調査区東側に位置する溝。検出高は、標高 3.55 m を測る。断面形態は、船底形を呈する。幅 0.42 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は灰色極細粒砂を基調とし、主軸は N - 50° - E を示し、S K 133・134、S D 116 に切られている。壺、甕の破片が出土しており、石庖丁片も含まれた。これら出土遺物の形態的特徴から弥生時代中期中葉のものと思われる。
- S D 116 調査区東側に位置する溝。検出高は、標高 3.55 m を測る。断面形態は、船底形を呈する。幅 1.02 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は灰色極細粒砂を基調とし、主軸は N - 66° - E を示し、S D 116 を切っている。壺、甕の破片が比較的まとまって出土しており、石鏃も 1 点含まれた。これら出土遺物の形態的特徴から、弥生時代中期中葉のものと思われる。
- S X 103 調査区東側に位置する遺構。検出高は、標高 3.5 m を測る。断面形態は、船底形を呈する。残存幅 0.98 m、深さ 0.11 m を測る。埋土は灰色極細粒砂を基調とし、主軸が L 字状に曲がる内側が検出され、S X 107 を切っている。出土した壺、台付甕等は、弥生時代後期または古墳時代初頭に位置づけられる欠山式の形態的特徴を有する。

第2項 上層遺構

岡島遺跡の上層は、近世と思われる遺構が調査区内に散在する状況で検出された。その内訳は、土坑 11 基、溝 3 条、不定形土坑 1 基、杭列 1 条である。出土遺物から遺構の時期を判断すると、主体が近世以降に位置づけられると思われる。これらの遺構は、ほとんどのものが遺物を伴わず、正確な時期までは捉えられなかった。以下に主要な遺構について説明をする。

S K 01 調査区北側東壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 4.05 m を測る。平面形態は、不整楕円形を呈する。長径 1.36 m、短径 0.6 m、深さ 0.33 m を測る。埋土は緑灰色シルトを基調とする。断面形態が台形を呈し、上端よりも下端が広がっている。遺物は含まれていなかった。

S K 02 調査区南側北壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 4.12 m を測る。平面形態は、不整方形を呈する。長径 0.82 m、短径 0.64 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は暗緑灰色シルトを基調とする。断面形態は逆台形を呈し、S K 03 を切っている。遺物は含まれていなかった。

S K 03 調査区南側北壁寄りに位置する土坑。検出高は、標高 4.12 m を測る。平面形態は、不整楕円形を呈する。長径 1.36 m、短径 0.6 m、深さ 0.33 m を測る。埋土は灰色シルトを基調とする。S K 02 に切られており、遺物は含まれていなかった。

S D 01 調査区北側に位置する溝。検出高は、標高 4.36 m を測る。断面形態は、逆台形を呈する。深さ 0.54 m を測る。埋土は灰白色シルトを基調とし、主軸は N - 31° - E を示す。近世後期と思われる土人形片が出土している。この土人形は、大黒をかたどったものと思われる、表裏をそれぞれ型作りして合わせたもののうち、表左下半片である。

S A 01 調査区南側に位置する杭列。検出高は、標高 4.10 m を測る。調査区を横断するように 10 の杭穴が検出され、このうち 8 穴には、杭となった木材が残っていた。主軸は N - 46° - W を示すが、それぞれわずかにはずれておりこの軸線にすべて並ぶわけではない。杭間の距離は、0.62 ~ 1.2 m と一定ではない。



第18図 S D 01出土遺物 (原寸)

第V章 遺物

第1節 出土遺物

岡島遺跡の今回の調査区では、出土遺物の総量は深さ 14 cm のコンテナで約 60 箱（大型品を除く）である。これらの出土遺物の時期は、前述のように弥生時代中期から古墳時代初頭のものまでが主体としてみられた。以下に、出土遺物を遺構別に説明する。

弥生土器

S K 101 1・2 は弥生後期前葉に属す壺で、同一型式であろう。2 はやや内彎して伸びる口縁部に外方へ屈折して端部がつく。伊勢地方とも類似する在地の形態である。波状紋は下部が尖って連弧紋風である。

S K 102 3 は底部が突出しており弥生後期後半か。

S K 105 4～7 は弥生中期後葉の凹線紋土器期に属す。5 は大型鉢（鍋）か。6 は皿状杯部にいささか短い脚部がつく。脚端は跳ね上げ状に終わる。小さな円孔が穿たれている。小さな円孔が盛行するのは三河地方の特徴であろうか。

S K 123 8 は古墳時代に属す在地の甕か。

S K 133 9～47 は弥生中期中葉の土器群である。9・10・13 は同時期尾張地方の櫛描紋系土器に類似する。13 は口縁部外面に櫛原体による調整が斜位に施され、条痕紋系土器の系譜にあることを示している。10 も口縁部外面に斜位に調整が加えられている。上記以外はいずれも在地の土器である。12・14・17・18 は長頸壺のラッパ状に開く口縁部で、外面に斜走沈線紋や斜走櫛描紋が施されている。12 の口縁端部には櫛描紋が施されている。15～40 は壺体部片である。

16 は長頸壺の頸部から肩部にかけての破片で、沈線に分割された無紋帯と斜格子紋帯、幅広の櫛描紋帯から構成され、斜格子紋帯上には沈線で、櫛描紋帯には櫛でそれぞれ八字状に紋様が付加される。

15 は長頸壺から変化して頸部が短くなったもので、紋様帯が 1 条沈線で区画される。無紋帯上部の隆起部分には斜走沈線、下部の櫛描紋帯には 3 条 1 単位の連弧紋が施されている。八字状紋は連弧紋とは無関係に、2 条区画沈線まで達している。

20 は 16 を基本として斜格子紋帯に 2 条 1 単位の連弧紋を加えている。36 も同様である。22 は連弧紋を櫛描紋に置き換えている。40 は斜格子紋帯から波状紋を垂下させ、2 条区画沈線をめぐらす。

24 は地紋が羽状沈線紋で、下部無紋帯との区画は刻み突帯状になっている。28 は 2 条

沈線間に二枚貝背面圧痕が充填されている。33は斜走沈線帯2帯で2条1単位の連弧紋が施されている。

21は二枚貝条痕を地紋として沈線連弧紋、条痕を充てんする連環状弧紋が施され、やや時期が古い資料である。38も二枚貝条痕である。

41～47は甕である。外面は櫛原体による調整で、44以下の口縁端部は壺と同様に加飾されている。42は口縁部の屈曲がうかがえるが、その他は緩く外反したままになっている。また、41・47のように口縁部を折り返しているものも認められる。

S K 137 48～50は弥生中期後葉の、凹線紋土器が普及する以前の在地土器である。48は口縁端部に部分圧痕、口縁部外面に沈線斜格子紋、頸部の2条沈線区画間には二枚貝刺突紋が施されている。49は地紋がナデ仕上げで、2条沈線区画には二枚貝刺突紋が施されている。

S K 138 51は凹線紋壺の体部破片、52は弥生後期の高杯脚部。

S K 142 53は弥生後期後半に属す壺である。54は壺頸部、55は高杯脚部。

S K 143 56は凹線紋壺、57・58は在地土器で、後者は大形鉢（鍋）か。

S D 102 60は袋状口縁細頸壺で、在地の模倣品か。

S D 103 61～70は凹線紋系壺で、65～67は在地変容形。68～70は袋状口縁細頸壺で、口径>口頸高になっている。71～75は在地壺、76は伊勢湾西岸系甕？、77は在地甕である。

78～80・82～88は在地壺である。78は櫛描多重連弧紋が施され、古い様相を示している。81・89・96は凹線紋系壺。90～93は在地甕で、90の口縁部の屈曲は強く、93の脚部は柱状部が長くなっている。94・95は大型鉢（鍋）である。口縁部の屈曲が強くなっている。

S D 104 97はほとんど類例を見ない、赤彩された台付無頸壺である。台は凹線紋系土器特有の大きな円孔が穿たれたもので、上下に凹線紋（沈線後ヨコナデ）帯が施されている。本体底部は円盤充填で、いったん鉢状の体部下半を作ってから円筒形の体部を作り上げている。体部から口縁部にかけては強く屈曲し、2条の凹線紋が施されている。肩部の強い屈曲は弥生中期末の瀬戸内系土器との関係をうかがわせるが、木製容器との関係も無視できないだろう。

以下は101・102・106・107が在地固有の土器。それ以外は凹線紋系土器。ただし、111・113～115は後期初頭に下がる可能性が高い。

S D 116 116～126は弥生中期後葉に属す。

116は台付細頸壺の脚台部。117・120は在地の台付甕。118・119・125は凹線紋系土器の影響を受けた外来形甕。

127～162は弥生中期中葉に属す。

127はラップ状に開く長頸壺の口縁部。128は区画沈線が3条になっている。132は135と同一個体である。頸部の隆起部分に相当し、斜格子紋2帯間に刻み突帯がめぐる。133は二枚貝調整で、口縁部はやや屈曲して内面には面をもつ。

134は主紋様が斜格子紋帯からなり、図上の最下段には二枚貝背面圧痕が施されている。

139・140 は尾張平野の櫛描紋系土器に類似する。

142 ～ 144 は沈線間に二枚貝背面圧痕が充てんされたもので、多重連弧紋を幾何学的にした変形紋様のような。134 の体部紋様になる可能性もある。とすれば、無紋地に加飾するのを基本とする二枚貝刺突連弧紋壺の三河バージョンといえようか。

147 は頸部隆起で、紋様帯間に刻み突帯がめぐる。150 は3条1単位の連弧紋で、下部連弧紋の谷部から下に垂下紋が付加されている。甕は、151・153～159が櫛調整、152・160・161が二枚貝調整である。162は大型鉢（鍋）の口縁部である。

S U 101 弥生後期中葉から後半に属す。163は体部に浮紋がはりつけられ、在地の特徴をよく示している。163・166は頸部の屈曲も弱く、古い様相を示す。164・165・167は体部がやや下膨れになって新しい様相を示す。

S X 103 169は口縁部の傾斜が強くなり、また内彎化も進行している。170はひさご壺である。171は口縁部が受口状口縁をなしており、通有形である。173は前型式にみられた口縁端部の刻みが上端に移行している。古墳時代初頭に属す。

S X 105 175～177は弥生後期末から古墳時代初頭に属す。

トレンチ 178はわずかに内彎してラップ状に開く口縁部をもち、頸部も絞りによる成形で、やや頸が長い感じを残している。弥生後期初頭に位置づけられる。櫛描で不規則な加飾を加える点は朝日遺跡の後期初頭資料に共通する特徴である。名古屋台地では見晴台遺跡溝資料に関連する。

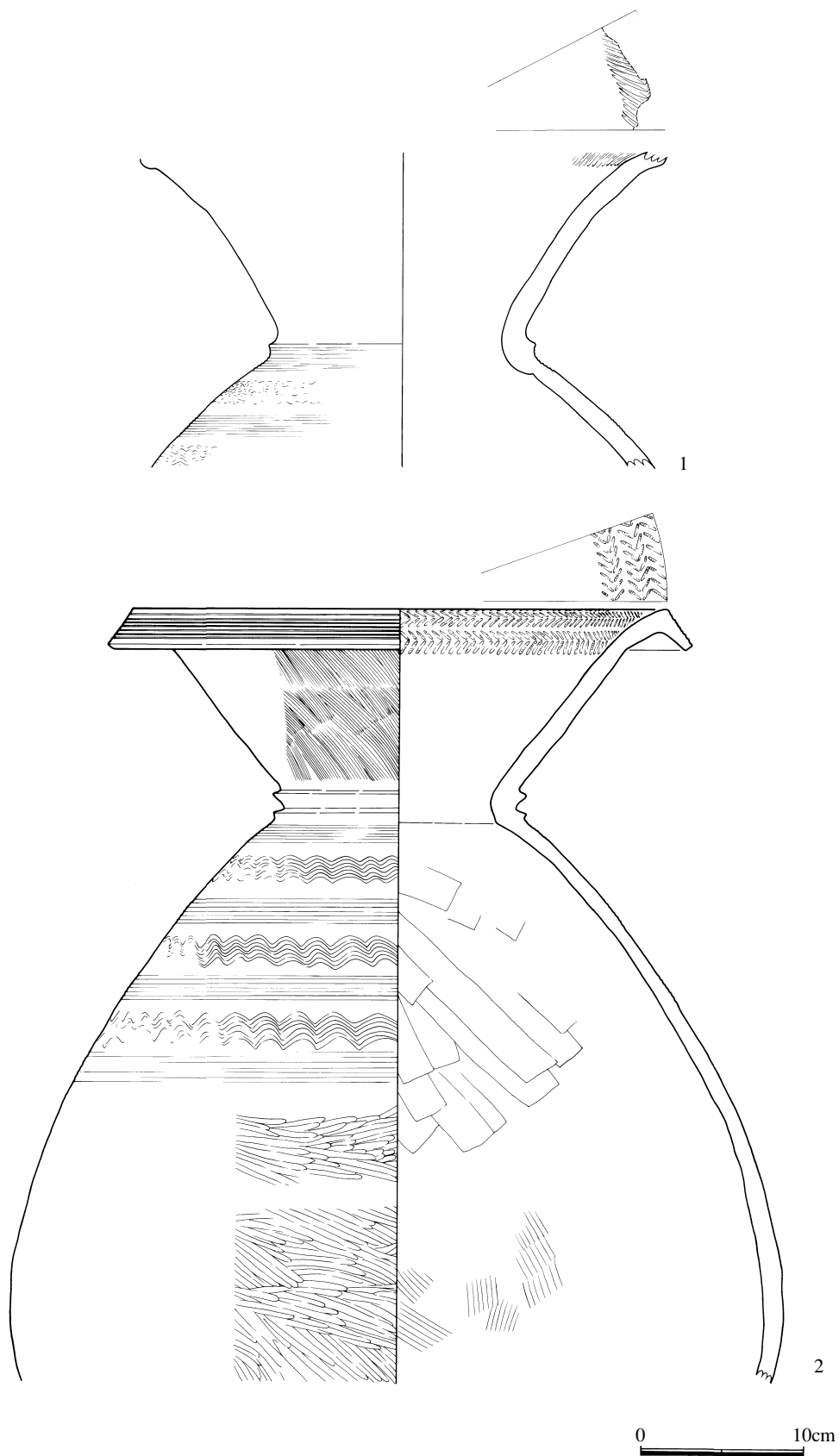
石器

磨製石斧 201はS D 103出土の刃部片。

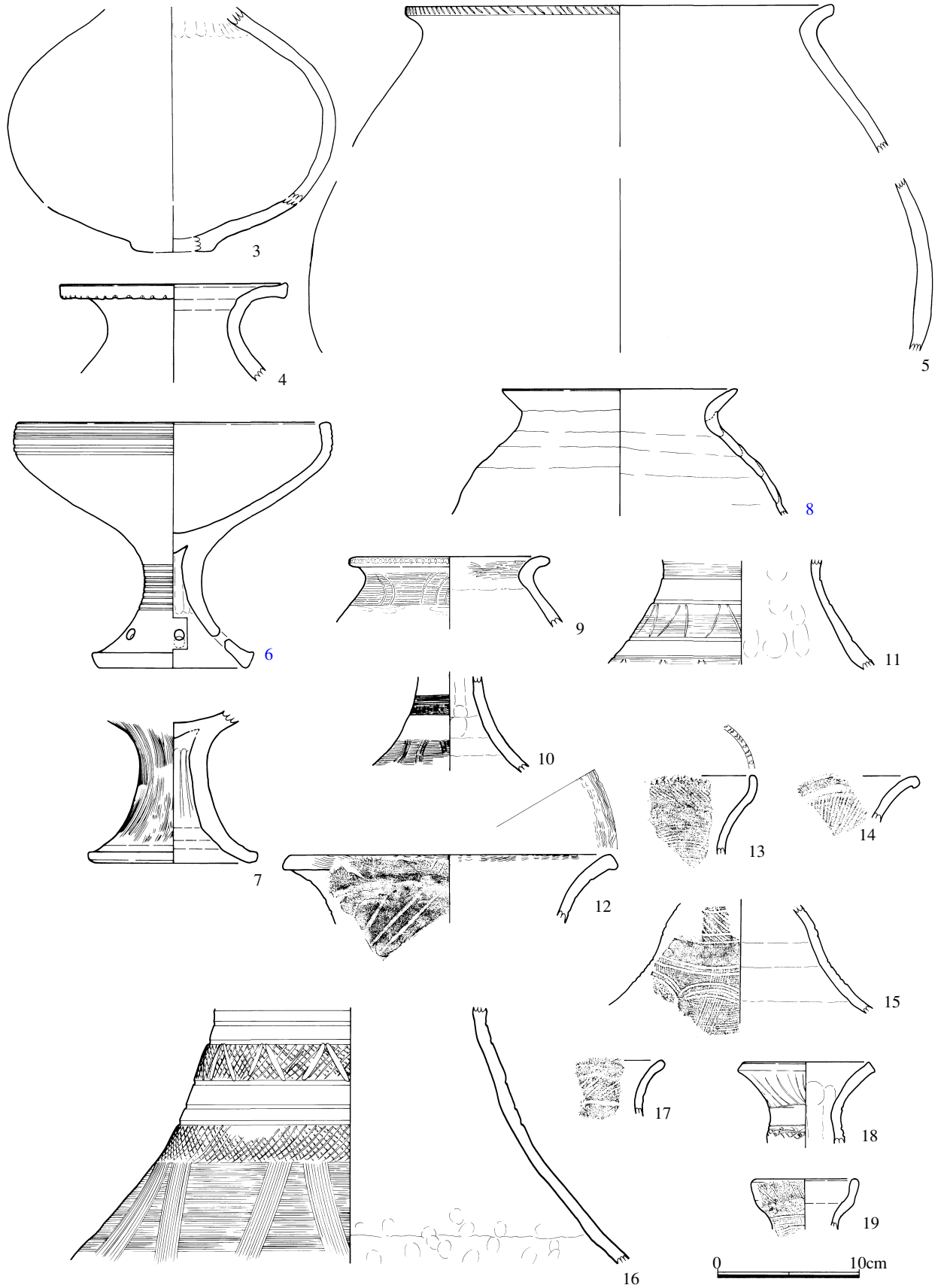
石庖丁 202は背部片である。大型石庖丁であろう。

石鏃 203は下呂石。肩部に潰れ状の抉り込みがみられる。204はチャート製で、先端がわずかに磨耗しており、ドリルに転用か。

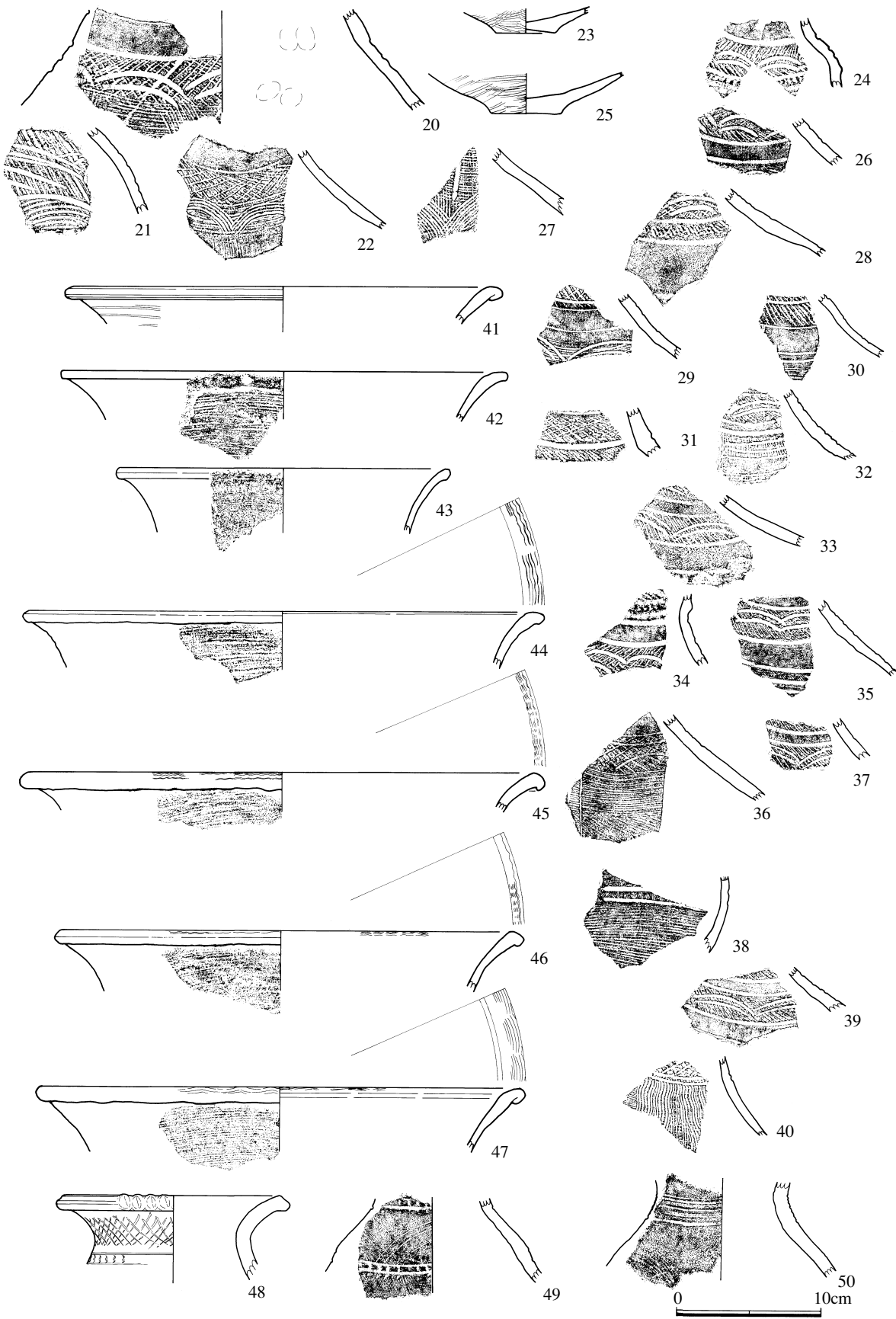
(石黒立人)



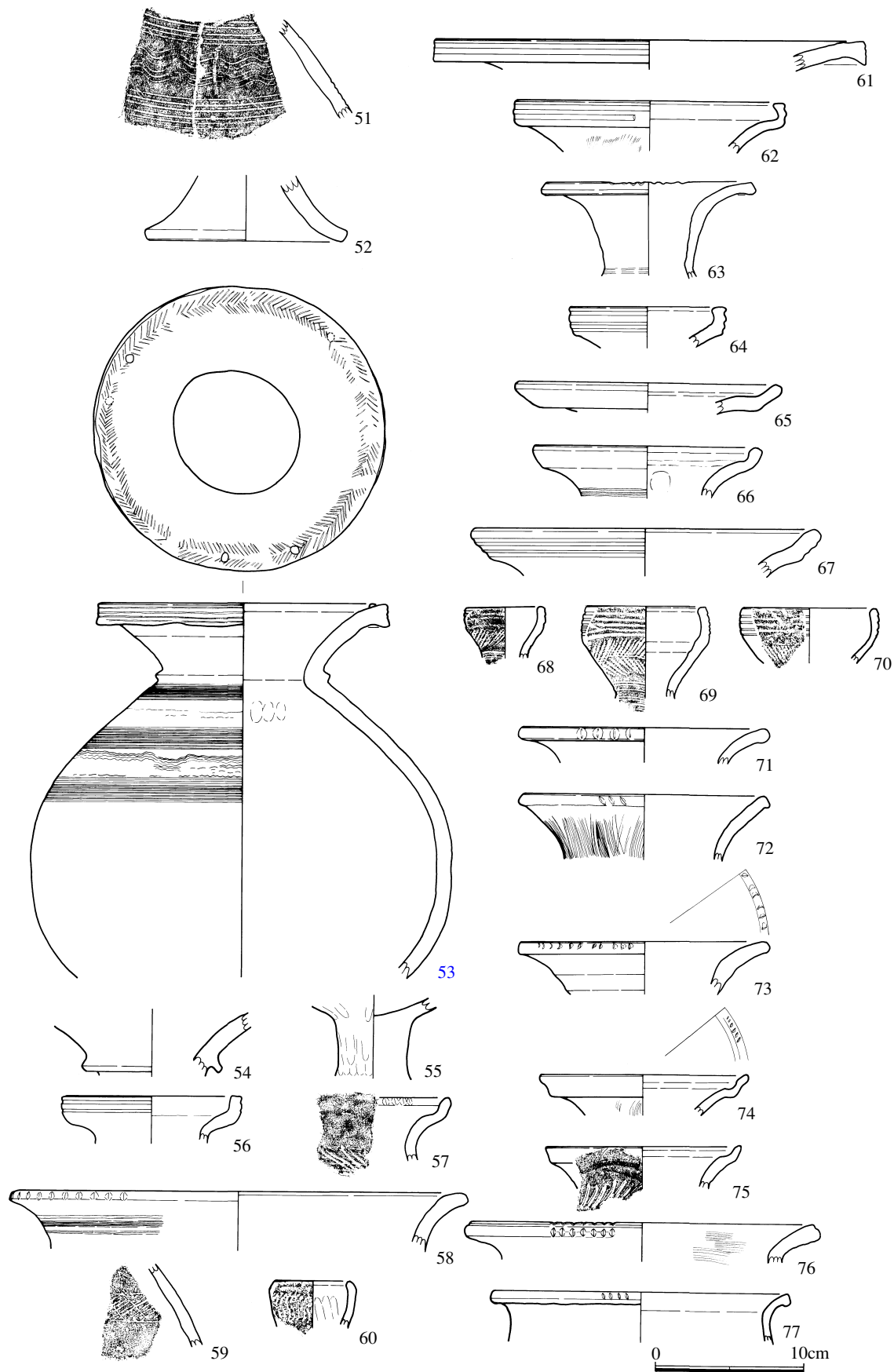
第19図 S K 101出土遺物実測図



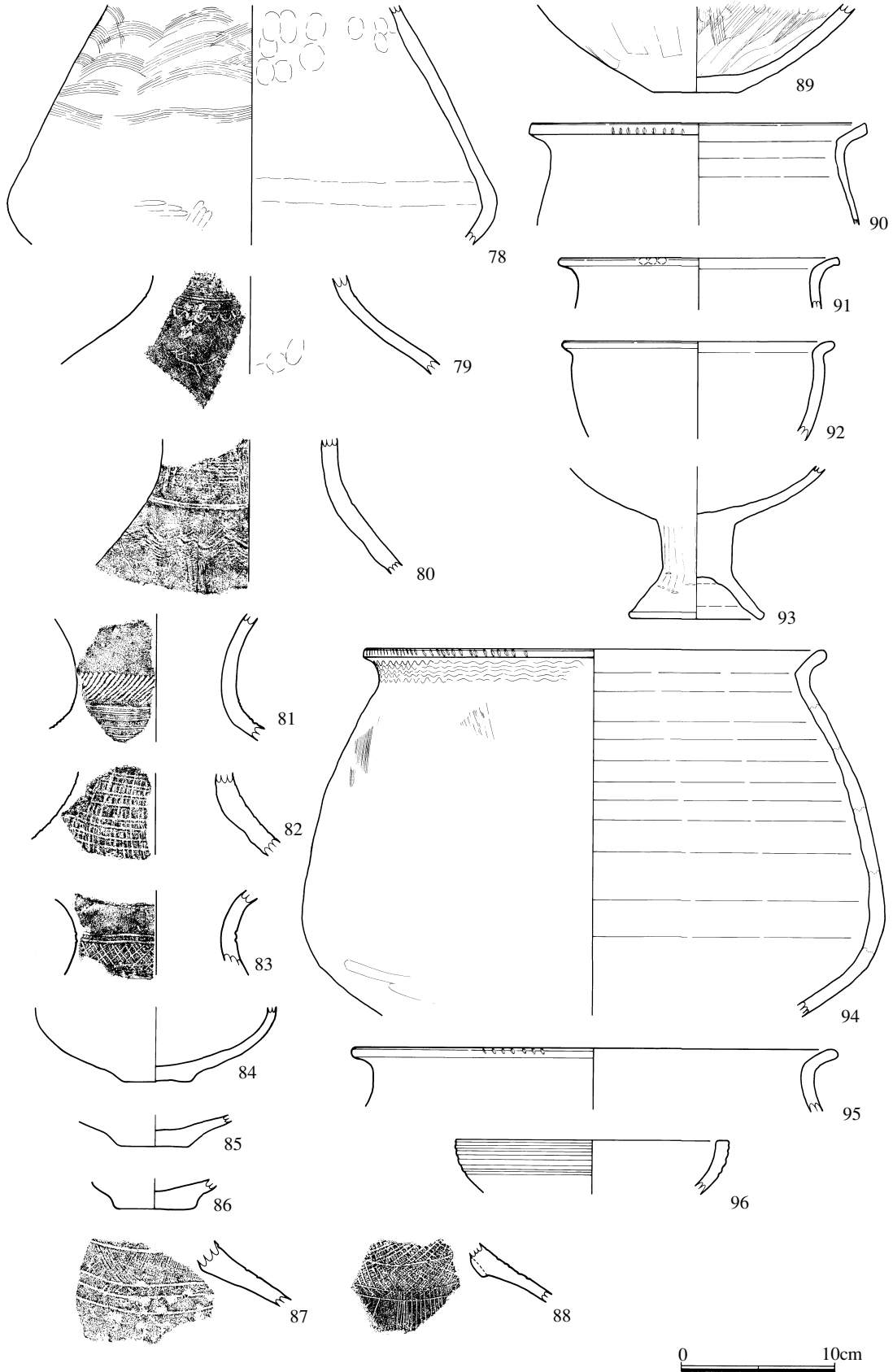
第20図 S K 102・105・123・133出土遺物実測図



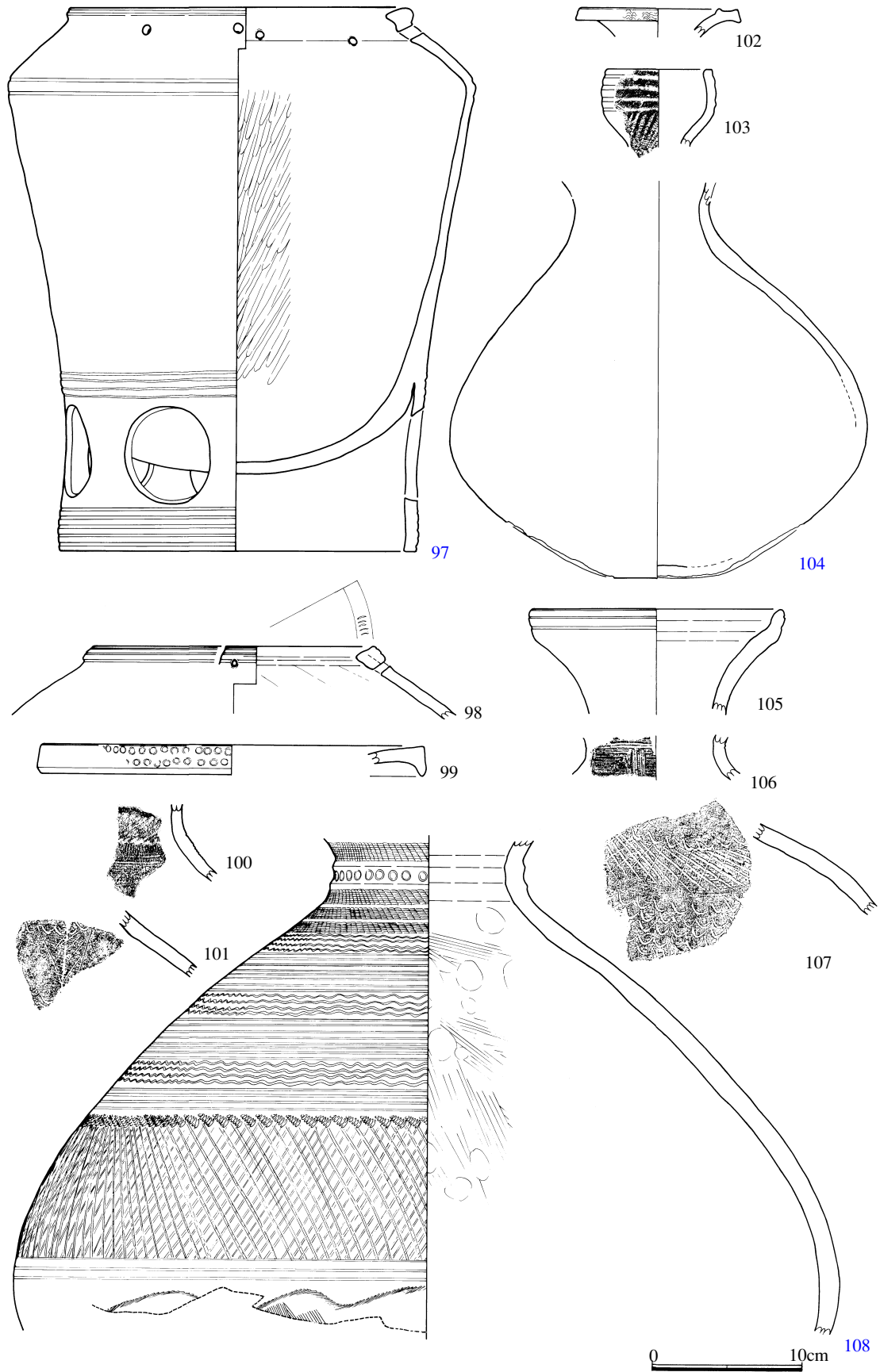
第21図 SK133・137出土遺物実測図



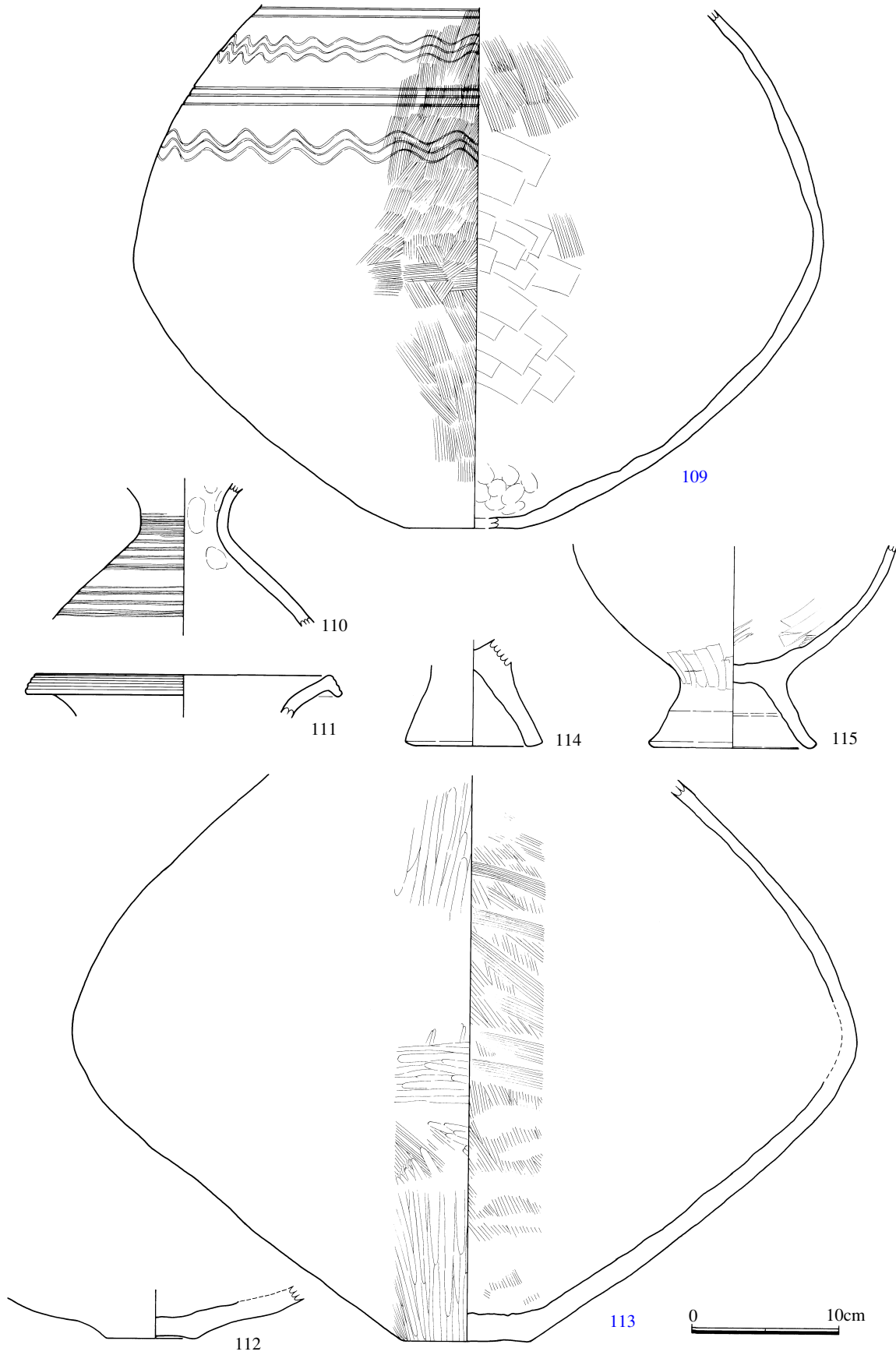
第22図 S K 138・142・143 S D 101・102・103出土遺物実測図



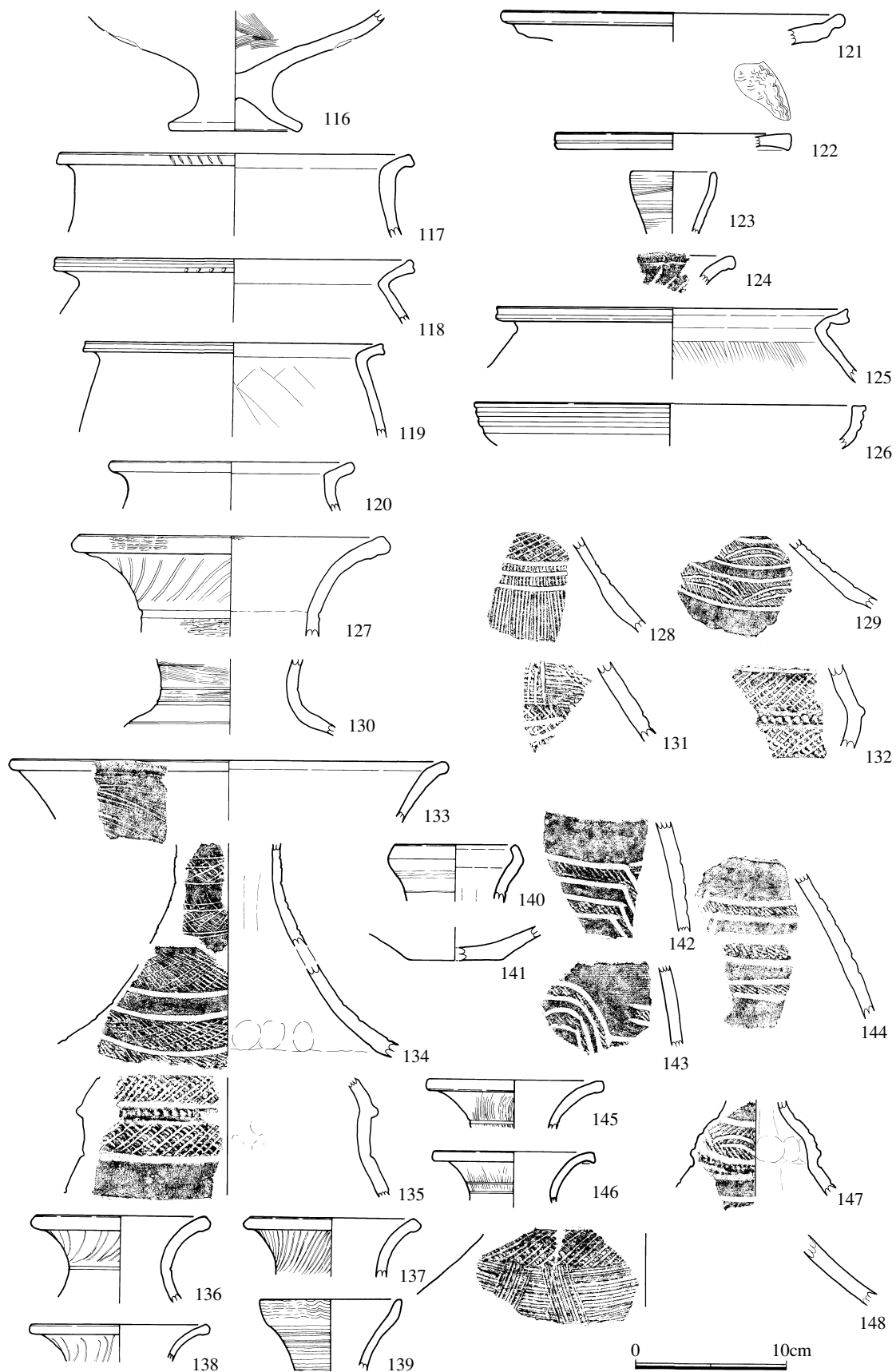
第23図 S D 103出土遺物実測図



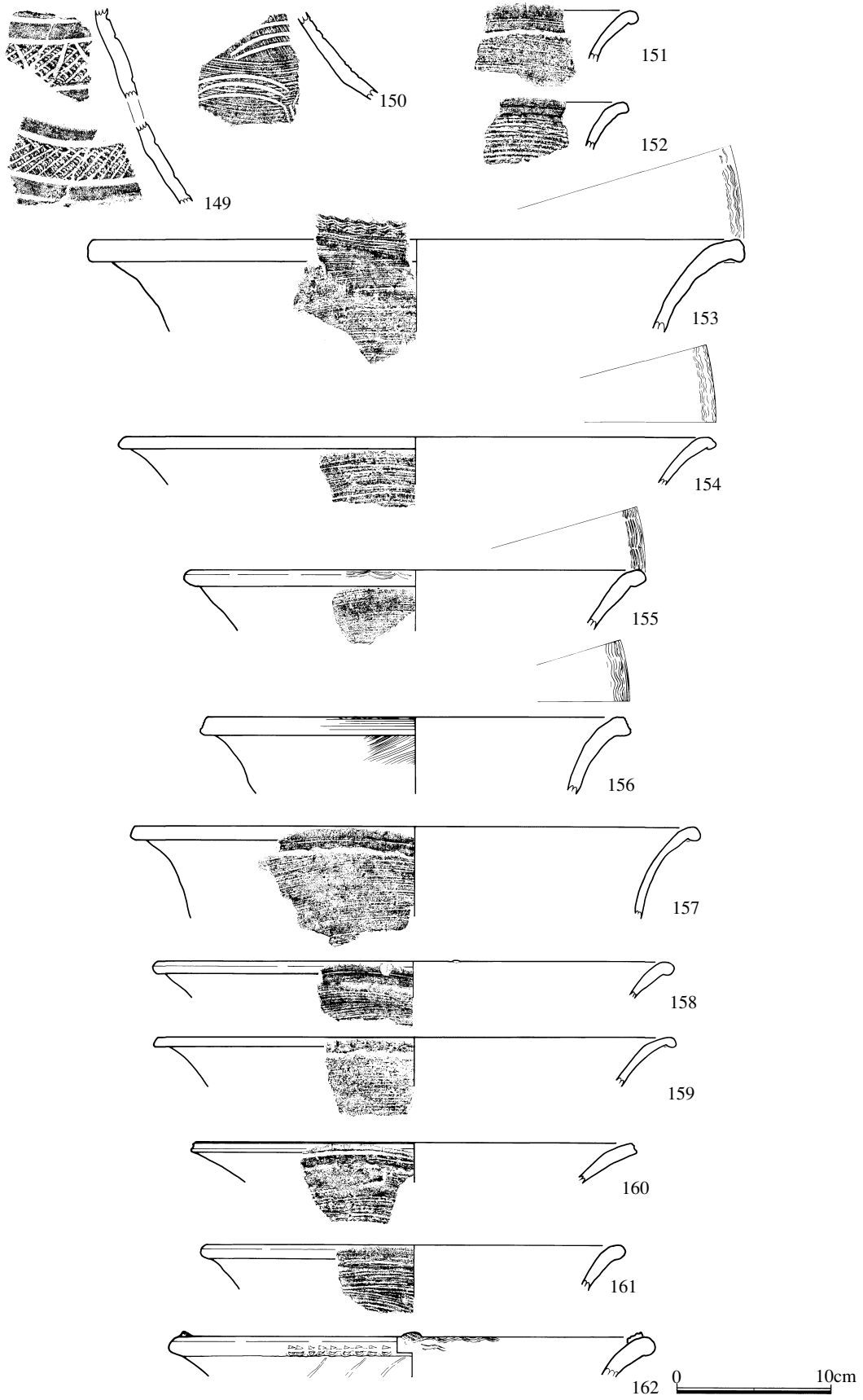
第24図 SD104出土遺物実測図



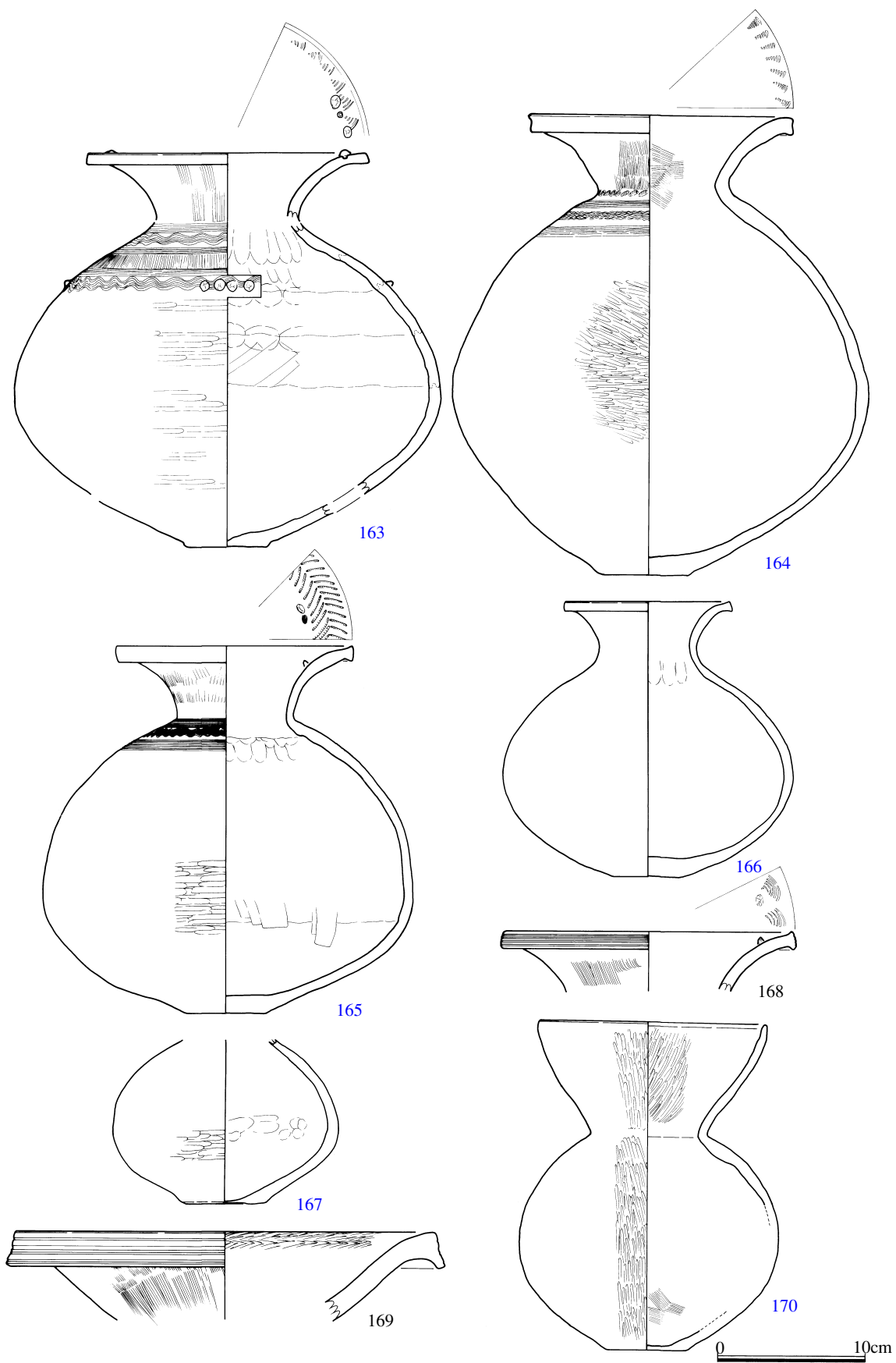
第25図 S D 104出土遺物実測図



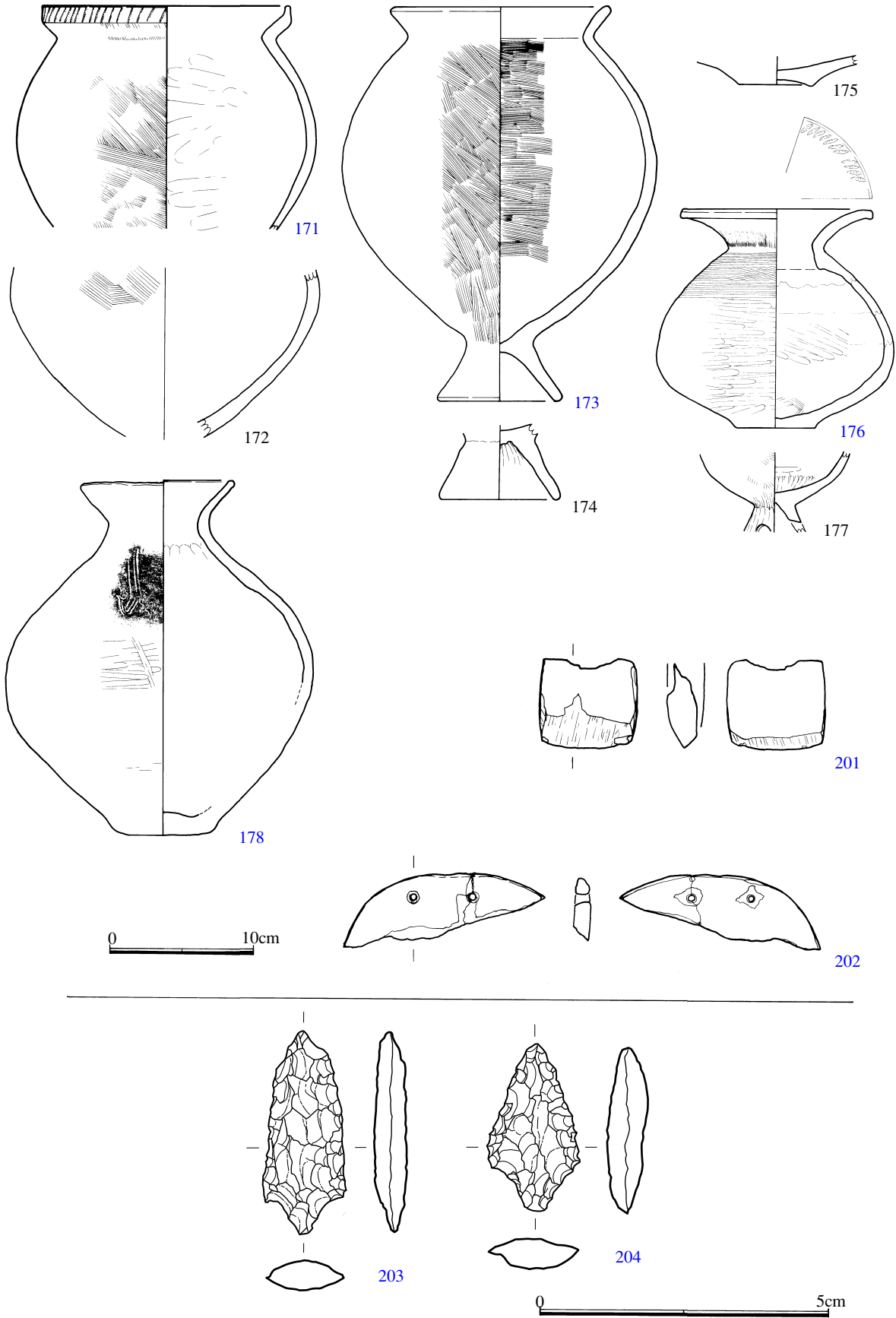
第26图 S D 116出土遺物実測图



第27図 SD 116出土遺物実測図



第28図 S U 101・S X 103出土遺物実測図



第29図 SK115・133・137 SD103・116 SX103・105 南壁トレンチ出土遺物実測図

第2節 岡島遺跡出土土器に関する若干のコメント

ここでは弥生中期土器、とりわけ瓜郷式に併行する資料を取り上げる。

今回注意にのぼった点は、①壺の隆起部に施される斜走、もしくは羽状沈線、②斜格子紋帯に加えられた連弧紋、③2条沈線区画、の3点である。

①について

年代的な位置を考えるにあたって参考になる尾張地方の資料をみると、中期中葉でも後半の土器に共存する搬入された瓜郷式壺に同類はない。そのほとんどは粗い櫛原体による斜走櫛描紋であり、今回の資料とは相違がある。可能性としては、斜格子紋帯が崩れはじめる初期か、沈線手法と櫛手法が分岐するかのどちらかということになる。

②について

該期資料によくみられる斜格子紋帯は当初は単独で用いられていたものである。今回出土した資料のように、沈線で八字状紋や連弧紋を複合させる資料は時期的に下がったものと考えられる。

③について

瓜郷式もしくは類似資料を概観して気づくのは、典型的な長頸壺ではなく、長頸壺の頸部が詰まって隆起部が目立つようになった段階の壺に2条沈線区画が認められること、凹線紋系土器共存期資料の初期資料に2条沈線区画が認められることである。つまり、年代的に一時期を画するのであって、後半期には二枚貝刺突紋が充てんされることから、2条沈線区画のみの資料は瓜郷式併行期の後半段階の指標になると考える。

いわゆる瓜郷式を考えるための3つの点

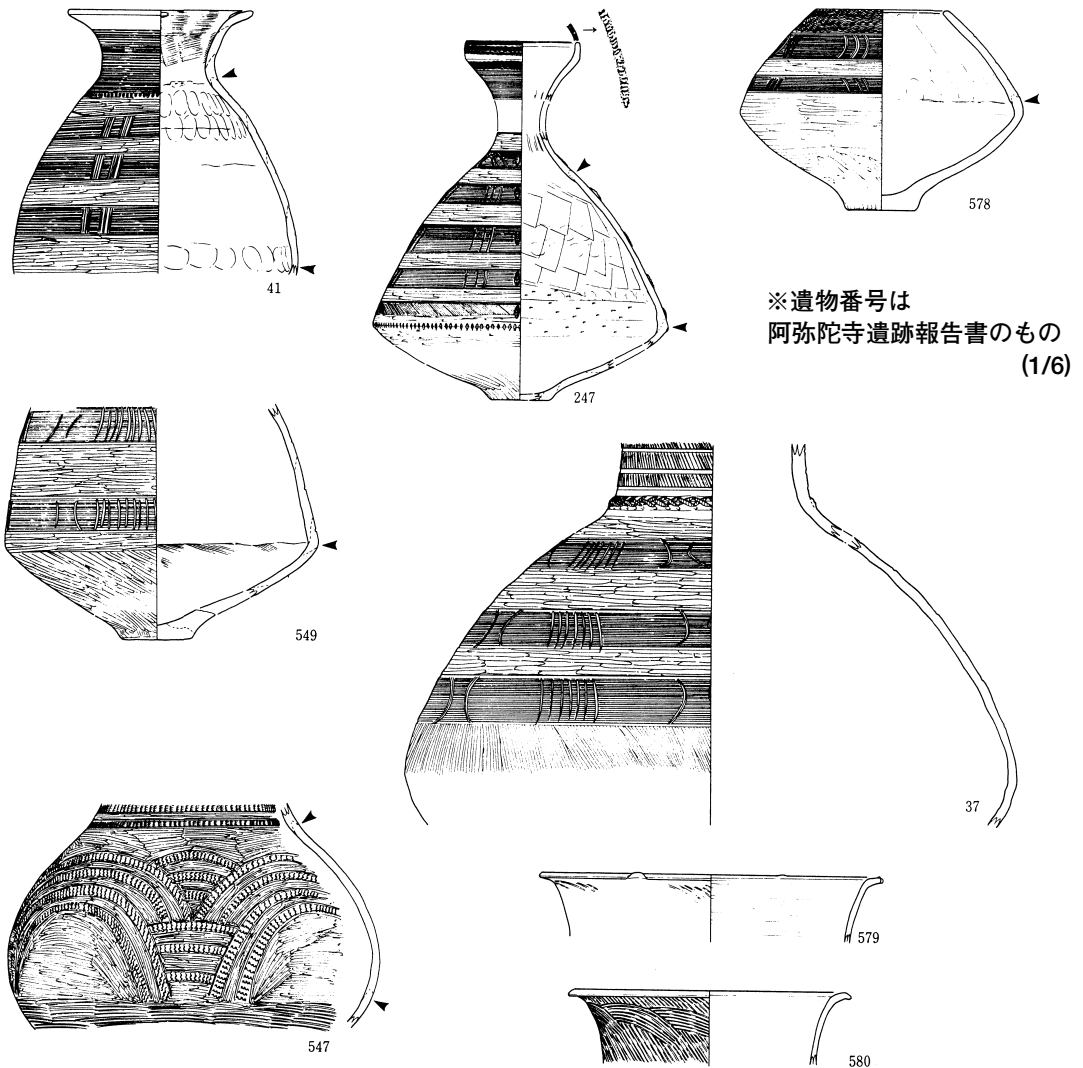
第30図は瓜郷式に関係する土器を掲載した。壺形や甕形の形態、紋様要素や紋様構成に関係するものである。紋様構成では櫛描紋帯に櫛描紋のみを重ねる尾張地方、櫛描紋帯に沈線を重ねる伊勢湾西岸部、そして連弧紋、そのいずれも無関係ではない。

第31図にはまったく関係がないものと、一見関係なさそうだが、実はありそうなものを掲載した。壺の縄紋施紋は東部地域との関係で表れるのみで、瓜郷式固有の要素として縄紋は含まれてはいない。沈線紋系土器は、小型壺形や鉢型としては存在しない。しかし、大型鉢（鍋）が煮沸具として使用されるのになにゆえ加飾されるのかと考えたとき、口縁部内面の突起とそれを取り込んだ紋様構成が沈線紋系土器のそれと無関係であるとは思えない。もちろん大型鉢の原形は条痕紋系土器にある。しかし、問題は加飾法であり、その系譜は沈線紋系土器にあるのではという疑いを私はもつ。

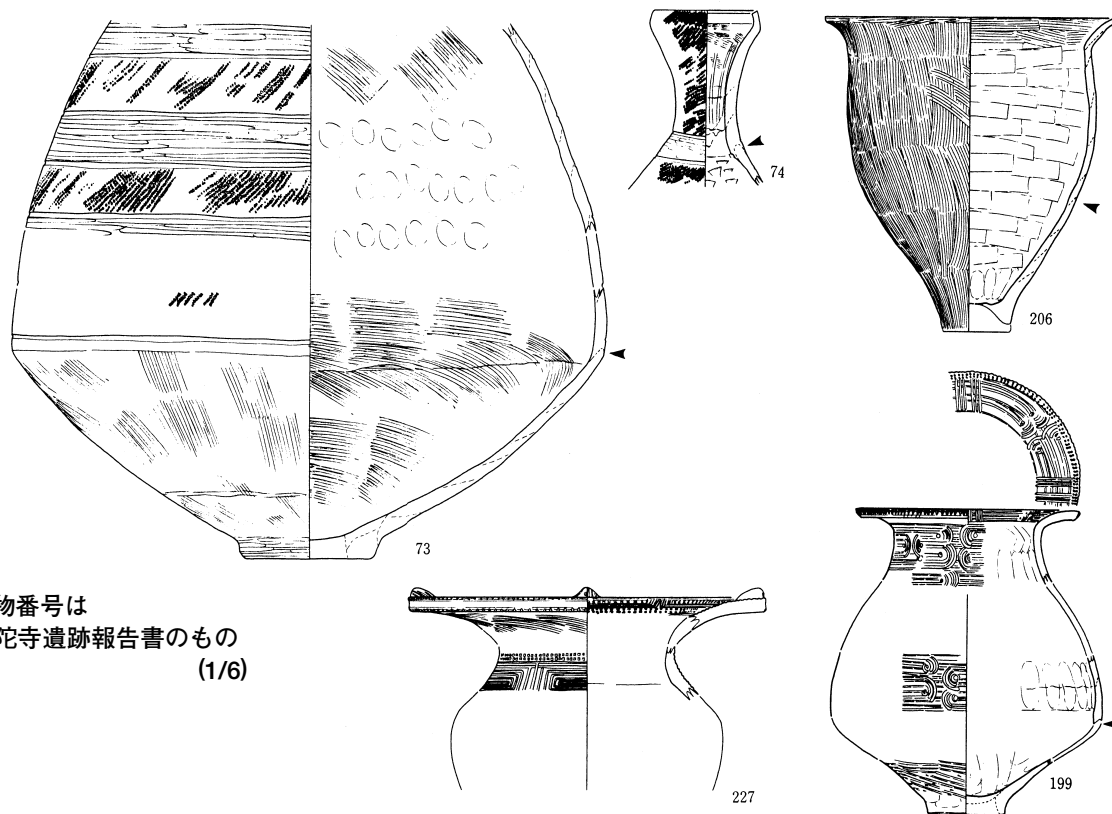
第32図は尾張地方で出土した瓜郷式壺と瓜郷式の製作手法によって作られた尾張地方

の櫛描紋系壺に類似する土器である。瓜郷式土器の尾張地方における搬入品の出土量は壺 > 甕で圧倒的に壺が優勢である。壺が地域間交流をよく表現している。しかし、反対に三河地方へは尾張地方の壺が搬入されることは皆無に近く、尾張地方からのものと判断された資料の大半が瓜郷式の製作手法によって作られた尾張地方の櫛描紋系壺に類似する壺である。先の製作物の動きからいえば、尾張地方の櫛描紋系壺に類似する土器が単なる生産物であれば尾張地方に多量に搬入されていたと考えられるが、事實はきわめてわずかしかない。おそらく出土することが不規則事例であったとさえ考えられる。それは壺が単に土製の製作物であったということではなく、それを生み出した意味空間によって存在が規定されたものであったことを示している。このことは、土器が単に実用的か非実用的かといった用途・機能によってのみ存在するわけではないことを示しているように思える。単に土器であるわけではないということか。この点はその他の実用的と考えられている資料にも該当する可能性が高いだろう。

なお、提示した資料はいずれも甚目寺町阿弥陀寺遺跡出土資料である。（石黒立人）

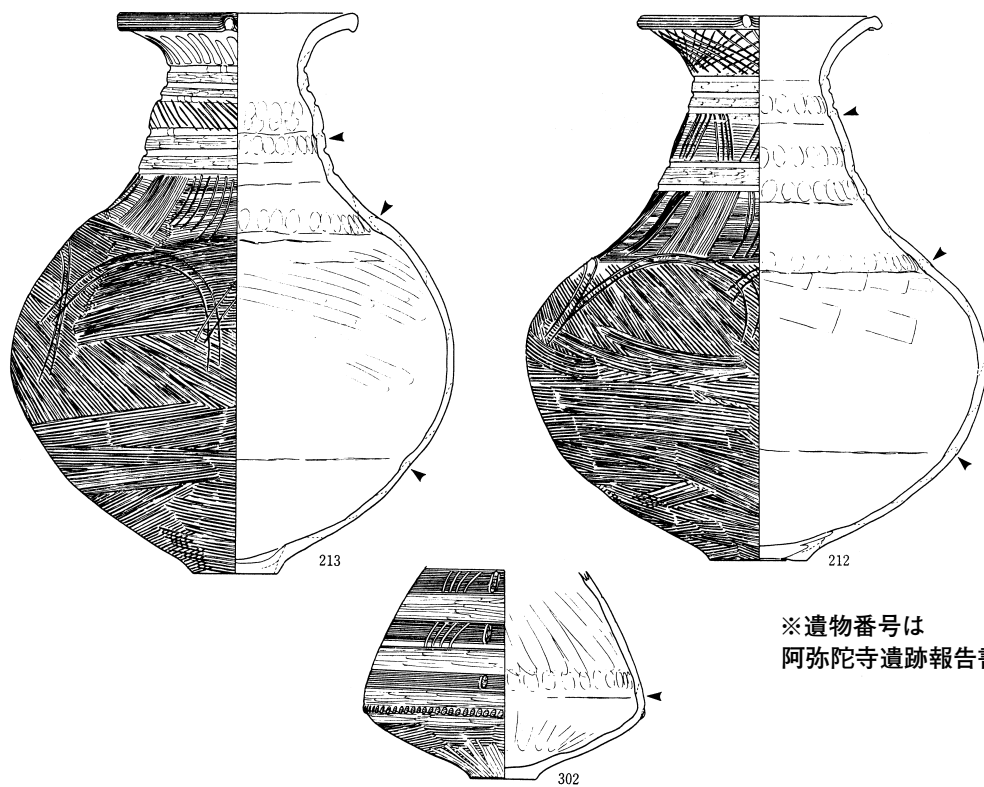


第30図 瓜郷式と関係する土器



※遺物番号は
阿弥陀寺遺跡報告書のもの
(1/6)

第31図 瓜郷式と無関係、もしくは一見無関係のように見える土器



※遺物番号は
阿弥陀寺遺跡報告書のもの
(1/6)

第32図 尾張出土の瓜郷式壺と、尾張系を模倣した壺

第Ⅵ章 自然化学分析

矢作川下流低地、岡島遺跡周辺の層序と古環境

はじめに 岡島遺跡の古環境については、すでに森・伊藤(1990)、森・前田(1993)等によって検討されている。森・伊藤(1990)は、機械ボーリングで得られたコアサンプルおよび深掘トレンチより採取したサンプルを対象とした珪藻分析・花粉分析・ ^{14}C 年代測定・昆虫化石の同定結果等をもとに、更新世末期以降の古環境変遷を明らかにしている。また、森・前田(1993)は深掘トレンチより採取したサンプルを対象として、珪藻分析・ ^{14}C 年代測定・昆虫化石の同定をおこない、縄文時代晩期から中世にかけての古環境変遷について言及している。これらの研究によって、岡島遺跡周辺の古環境は明らかになりつつある。本稿では、岡島遺跡を対象とした既存の古環境研究を整理し、新たに、シーケンス層序学的観点から矢作川下流低地におけるデルタの形成過程を復原した。

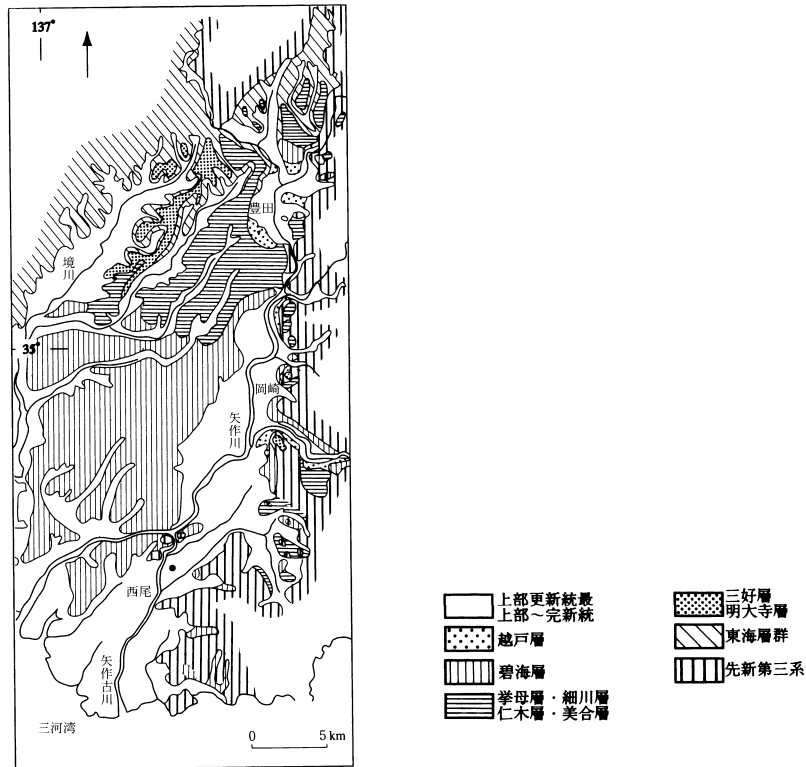
研究方法 本稿では、岡島遺跡 63A 区において実施したボーリング調査によって得られたコアサンプル(標高 6 ~ - 22 m)および岡島遺跡 63A 区・62B 区、90B 2 区における深掘調査の結果を再整理することにより、矢作川下流低地におけるデルタの形成過程を復原した。

地域概観 岡島遺跡は、矢作川によって形成された沖積低地の下流部、三河湾から約 12 km 内陸側に位置する(第33図)。今から約 6000 年前に生じた大規模な海進、「縄文海進」の最盛期の海岸線は、現在の海岸線より約 20 km 内陸側(東海道新幹線のやや北側)にあったと推定されている(森山・小沢、1972)。岡島遺跡は、縄文海進以降に生じた海退にともなって形成されたデルタ上に営まれた遺跡である。遺跡周辺には矢作古川や広田川によって形成された自然堤防やポイントバーが発達する。こうした現地表面に認められる微地形は、川瀬(1998)によって約 1400 年前以降に生じた河川氾濫の活発化を受けて形成されたことが明らかにされている。

また、岡島遺跡の立地する矢作川下流低地には、厚さ約 20m に及ぶ上部更新統~完新統の地層が伏在する(第表)。これらの地層は、下位より基底砂礫層・下部泥層・下部砂層・中部泥層・上部砂層・頂部泥層・頂部砂(礫)層に区分される(松沢ほか、1965; 森山・小沢、1972; 森山・浅井、1980)。各層の堆積時期は、下部砂層が 10000 ~ 7000 yrsBP、中部泥層が 7000 ~ 4500 yrsBP、上部砂層が 4500 yrsBP 前後と推定されている。また、上部砂層より上位層の堆積時期及び堆積過程については川瀬(1997)がデルタの離水過程と地形環境の変化という観点から詳細な検討がおこなわれている。岡島遺跡の立地する矢作川下流低地北部では、上部砂層の堆積は 3000 ~ 2500 yrsBP に終了し、2000 yrsBP までに頂部泥

第2表 層序区分

完新統	頂部砂(礫)層
	頂部泥層
	上部砂層
	中部泥層
	下部砂層
上部更新統	下部泥層
	基底砂礫層(第一礫層)
	越戸層
	碧海層



第33図 矢作川沖積低地周辺地域の地質図

●は岡島遺跡の位置を示す。

層が堆積、2000yrsBP以降に頂部砂(礫)層が堆積したことが明らかにされている。

岡島遺跡

63A区ボーリング・コアの層序と層相

岡島遺跡63A区において実施したボーリング調査によって得られたコアサンプルは、その層相により以下の6つの堆積ユニット(便宜的にそれらをOk-1~6とする)に区分できる(第34図)。この6つのユニット区分は森・伊藤(1990)による層序区分と基本的に同一の層序と層相である。なお、最上層である地表面から深度約3mまでの間は現在の盛り土と考古遺跡の発掘調査に伴う埋め戻しの堆積物であり、今回の記載からは除外した。

Ok-1:層厚約3m以上の礫を主体とした全体に粗粒な堆積物からなる。礫は長径2~4mmの細礫~小礫サイズである。基質は砂からなり、含まれる礫の割合は上方へ粗くなる。

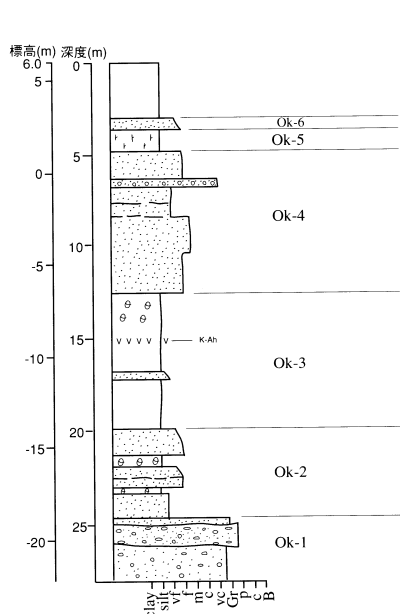
Ok-2:層厚約5mで、上方細粒化するシルト混じりの細粒砂層と砂質シルト層の互層である砂質シルト層中には貝殻片が認められる。

Ok-3:層厚約7.5mで、下部の砂混じりシルト層から上部のシルト層に至る上方細粒化するシルト層である。標高約-11mに層厚およそ40cmのシルト質砂層を挟む。上部の標高-8~-7m付近には貝殻片が認められる。標高-9mでは鬼界アカホヤ(K-Ah)火山灰(約6,300 yrsBP; 町田・新井, 1976)が確認されている。

Ok-4:層厚約8mのシルト混じり砂層と礫混じり砂層からなり、下部から上部へ全体に上方粗粒化する。

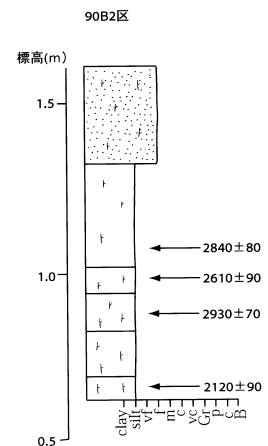
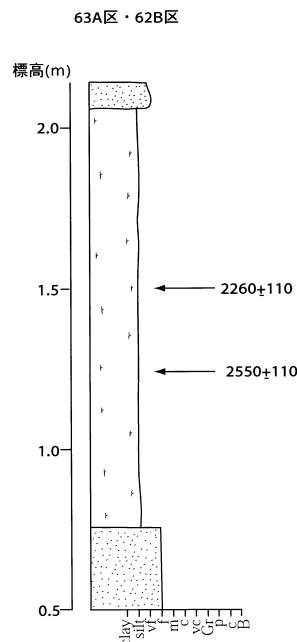
Ok-5:層厚約1mの、砂を混じえる全体に腐植質なシルト層で構成される。

Ok-6:層厚約0.6mの細~中粒砂層からなる。本層は岡島遺跡の基盤層にあたり、本層の上位は考古遺物包含層に覆われる。



第34図 ボーリング・コアの層序と層相

森・伊藤 (1990)を基に作成。



第35図 深堀層序および放射性炭素年代

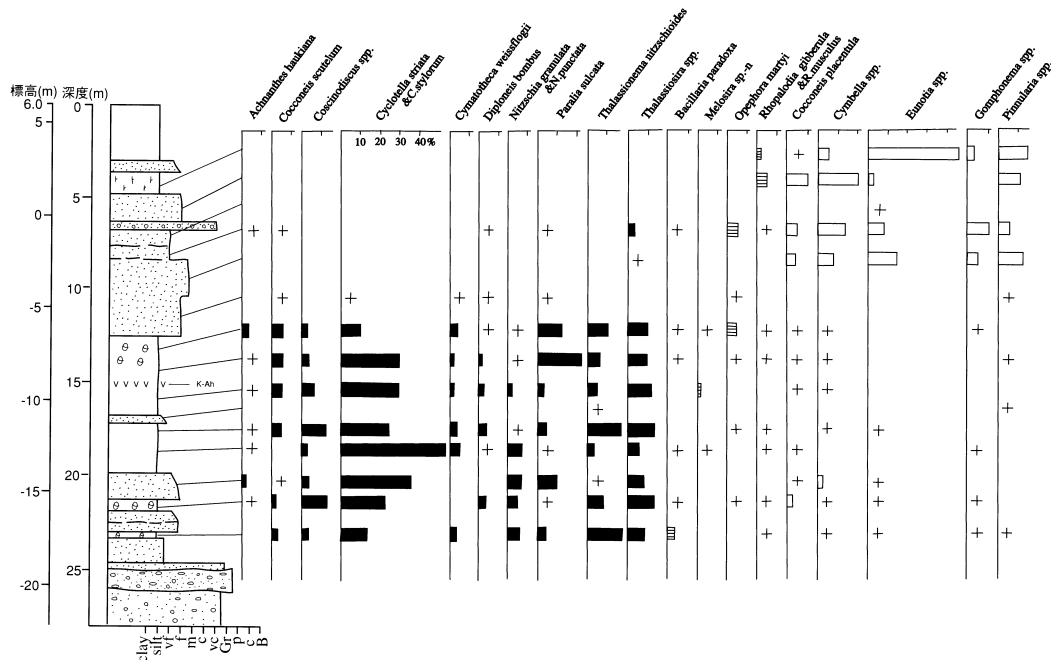
森・伊藤 (1990)および森・前田(1993)を基に作成。

岡島遺跡63A 岡島遺跡 63A 区・62B 区、90B 2 区では、遺構面以下の層相・層序を把握することを目的として、深堀調査がおこなわれている。各地点の層相・層序を第35図に示す。それに
90B2区の深掘調査の結果
よると各地点ともに標高1m前後に腐食質のシルト層が発達する。この層準では複数のサンプルを対象として ^{14}C 年代測定がおこなわれている。63A区・62B区における深堀調査では2点のサンプルについて ^{14}C 年代測定がおこなわれており、下部より $2550 \pm 110\text{yrsBP}$ 、 $2260 \pm 110\text{yrsBP}$ という値が得られている。また、90B2区では4点のサンプルについて ^{14}C 年代測定がおこなわれ、下部より $2120 \pm 90\text{yrsBP}$ 、 $2930 \pm 70\text{yrsBP}$ 、 $2610 \pm 90\text{yrsBP}$ 、 $2840 \pm 80\text{yrsBP}$ の値が得られている。63A区・62B区、90B2区で確認された腐食質シルト層は、出現深度および ^{14}C 年代値がほぼ同じであることから、同一の層であると考えられる。また、この腐食質シルト層はその出現深度から先に分類したボーリング・コアのOk-5に相当すると考えられる。

堆積環境と 次に、岡島遺跡63A区で得られているボーリング・コアについて、森・伊藤(1990)の珪藻分析の結果を参考にして各層準ごとの堆積環境の推定を試みる。

堆積システムの解釈 Ok-1:礫混じりの粗粒砂層と砂礫層からなり、礫は細礫～小礫サイズの亜角礫からなるため礫質河川での堆積物と解釈される。

Ok-2:シルト質細粒砂層と砂質シルト層との互層からなり、上方細粒化する。最下位層準では淘汰良好な細～中粒砂層で構成され、*Synedra ulna*などの淡水生珪藻殻片をわずかに産することから礫質河川である。中～上位にかけてシルト層中には海生の貝殻片や海生・浮遊生種の *Thalassiosira* spp.、*T.nitzschioides*、*Cyclotella striata*、*C.stylorum*、汽水泥質干潟指標种群の一種である *Nitzschia grannulata*、*Diploneis smithii*が見られる(第36図)。



第36図 ボーリング・コアの珪藻ダイヤグラム

森・伊藤 (1990)を基に作成。

以上のことから、河川からの砂の供給をまれに伴うプロデルタ基部の堆積物と推定される。

Ok-3:層厚7.5mにもおよぶ厚いシルト層が卓越し、海生・浮遊生種の*Thalassiosira* spp.、*T.nitzschoides*、*Coscinodiscus* spp.といった種群が多産することから、河川の影響を被ることのほとんどないプロデルタ縁辺部で堆積したものと推定される。

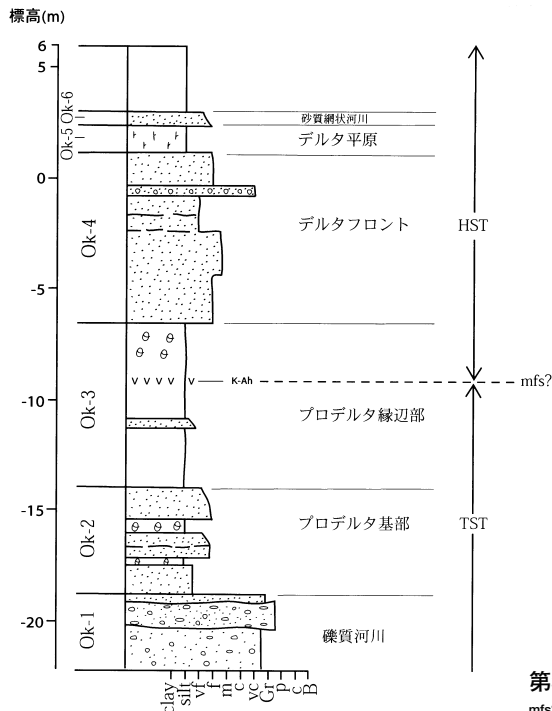
Ok-4:淘汰良好な細～中粒砂層が卓越し、上方粗粒化が認められる。本ユニットの最下部層準では海生の珪藻種群が多いものの、上部では *Eunotia* spp.、*Cymbella* spp.、*Pinnularia* spp.などの淡水付着生種群が卓越するようになる。このことから、デルタフロント堆積物と推定でき、上部での淡水生珪藻種群の卓越は海側へのデルタフロントの前進を示す。

Ok-5:植物片や腐植を含むシルト層からなる。*Eunotia* spp.、*Pinnularia* spp.といった淡水付着生の珪藻種群が卓越し、珪藻含有殻数が極めて多い。デルタフロント上に出現したデルタ平原堆積物である。本層に相当する層序は、岡島遺跡 63A 区・62B 区、90B2 区における深掘調査でも確認されており、広範囲にわたって発達していたことが推測できる。14 C年代値は $2930 \pm 70 \sim 2120 \pm 90$ yrsBP を示す。

Ok-6:細～中粒砂層が卓越し、層相の側方への変化が激しい。また、砂層中には植物の葉・枝が含まれる。このことから、砂質網状河川の堆積物と推定される。

シーケン ス層序学的 解釈に基づ くと、以上、岡島遺跡 63A 区のボーリング・コアデータおよび岡島遺跡 63A 区・62B 区、90B 2 区における深掘調査の結果を整理し、岡島遺跡周辺における堆積環境の変遷を推定した。これらをシーケン ス層序学的 (例えば、Van Wagoner et al.,1988) に解釈するならば次く岡島遺跡 のとおりである (第37 図)。

地域の地史 森ほか (1990) はOk-1、Ok-2 を更新統に属する地層と捉えた。しかし、その推定根拠につい



第37図 岡島遺跡地点の堆積環境と堆積シーケンス

mfs? : 最大海氾濫面の層準, TST : 海進期堆積体, HST : 高海水準期堆積体

ては述べられていない。63A区ボーリング・コア下部で見られるような厚いシルト層下部の砂礫層ないし砂層とシルト層との互層は、濃尾平野においても確認されている(鬼頭ほか, 1998)。また、Ok-2最下部層準の淡水生珪藻の出現から、上部に向かうに従って海生・浮遊生珪藻種群が増加傾向を示す事実は、本ユニットにおいて相対的に海水準が上昇していることを示す。このような結果は、濃尾平野のデルタ上に位置する一色青海遺跡で行なったボーリング・コアの解析結果とも類似している(鬼頭ほか, 1998)。一色青海遺跡で得られたボーリング・コアでは、海水準の上昇を示す層相から約8000～7000年前の14C年代値が得られた。岡島遺跡のOk-2もそれに相当するものと考えたい。

Ok-3上部は鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準であり、矢作川沖積低地において、この降灰層準の上位に最大海氾濫面が想定される。本層準付近で海生珪藻種群が卓越し、珪藻殻数が多いこともこれを指示する。Ok-1から鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準の標高約-9mまでを海進期堆積体として捉えることができる。

Ok-3の最大海氾濫面以降、Ok-4～6は完新統上部の高海水準期堆積体であると推定される。デルタフロントの海側(三河湾)への前進により堆積したのがOk-4であり、デルタフロント直上に現れたデルタ平原堆積物がOk-5、Ok-6である。Ok-5の腐植質シルト層は*Eunotia spp.*や*Pinnularia spp.*などの淡水生種で占められる。本ユニットに対比できる腐植に富むシルト層からは2930～2120 yrs BPの14C年代値が得られており、これは縄文時代晩期にあたる。縄文時代晩期の遺物を含む層準からは汽水生・浮遊生種の*Melosira nummuloides*、*Achnanthes brevipes var. intermedia*や海生・浮遊生種の*Thalassiosira nitzschioides*が確認されることより、海水～汽水の影響を被る下部デルタ平原(Coleman and Prior, 1982)での堆積が推定できる。また、腐植質シルト層最上部の標高約1.2～1.3mでは全てが淡水生種で占められ、陸生珪藻も23.4%ほど認められる。本層準直下の標高約1.1mの層準において2840±80 yrs BP

の年代値が得られている。岡島遺跡周辺では、その頃に淡水環境の卓越する上部デルタ平原へと変化したことがわかる。Ok-6 は植物の枝葉や倒木を挟む淘汰の良い細～中粒砂層からなる網状河川堆積物であり、河川環境が卓越するようになったことがわかる。

ところで、縄文時代晩期の頃の植物片や腐植質に富むシルトないし粘土層は、濃尾平野の三角州でも確認されている。鬼頭ほか(2000)は、先にあげた一色青海遺跡において層序解析と珪藻分析を行なっている。それによると、標高-1.5～-0.6mには腐植質粘土層が堆積し、高潮位高度指標種(Sato et al,1996)の *Melosira* sp.-n や汽水泥質干潟指標種群の *Diploneis smithii* といった珪藻遺骸の多産が見られた。標高-0.6～1.5mでは淡水生種が卓越したことから、標高約-0.6mを境として下部デルタ平原から上部デルタ平原へと堆積システムが変化したことが明らかにされている。また、その年代は $2870 \pm 70\text{yrsBP}$ であった。岡島遺跡においても下部デルタ平原から上部デルタ平原に変化するのが $2840 \pm 80\text{yrsBP}$ を示し、ほとんど同一の年代値を示している。濃尾平野地域と矢作川沖積低地地域において、ほぼ同じ時期に同じ層相をもった堆積物が見られる事実は興味深い。

デルタ堆積システムにおいて、デルタフロントを形成するデルタローブ上に有機物に富む堆積物が見られる報告は世界的に見ても多い。例えば、地質学的に Home et al.(1978)によるアメリカ、ペンシルバニア期のデルタ堆積物、Elliott(1975)や Pulham(1989)によるイギリスの石炭紀サイクロセム、Woodrow and Sevon(1985)によるアパラチア山脈のデボン紀、Catskillデルタ縁辺堆積物での報告がある。世界的に見ても普遍的な現象ではあるが、その成因については気候や海水準変動、テクトニックな影響など、堆積場ごとにいろいろな要素が複雑に関係していると思われる。濃尾平野地域と矢作川沖積低地地域で見られる縄文時代晩期を示す腐植質堆積物の成因にどのような要素が効いていたのかは、1地点ごとの結果の比較からはわからない。この点については、今後、調査地点が増えることにより詳細が明らかになるう。(鬼頭 剛・小野映介)

謝辞

本論をまとめるにあたり、ボーリングコア資料について愛知県立明和高等学校の森勇一博士にご教示いただいた。岡島遺跡および周辺遺跡の詳細について愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の松田 訓氏にご教示いただいた。図面の作成では愛知県埋蔵文化財センター調査研究補助員の尾崎和美氏・岩本佳子氏の両名にお世話になった。以上の方々に記して厚くお礼申し上げます。

付記：文献についての詳細は直接著者に問い合わせ願いたい。

第Ⅶ章 まとめ

本報告書では、西三河地域の代表的な弥生時代集落遺跡として知られる岡島遺跡について整理報告作業を行った。調査によって得られたいくつかの情報について、その意味するところを私見も交えてまとめてみたい。

空間特質

遺構については、下層遺構が調査区全体で3群のまとまりがあると解釈し、群ごとに取り上げることにより、その検出内容にも各群なりの特徴が見出せることをねらった。上層遺構は、遺構群を設定するほどのまとまりはみられず、掘削時期・掘削理由の把握をねらった。

A遺構群は、L字形の調査区において南側の最も大きく開けた部分に展開するが、土坑などの小規模な遺構は少なく、幅3m前後の浅い溝が区画を成すように直角に方向を変えており、この溝で囲まれた部分がほぼ同型の面積で方向を合わせて、南北に2または3区画縦列する。この連続区画を溝を共有する方形周溝墓として捉えた場合、溝の浅さなどから後世の削平によってマウンド、主体部が滅失したとも推定できる。SD 104 端部では、弥生時代中期末から後期の土器が集中して検出されたが、これだけの材料のみで方形周溝墓と断定できるものとも思われず、墓域の可能性を有する地点との解釈に留めた。

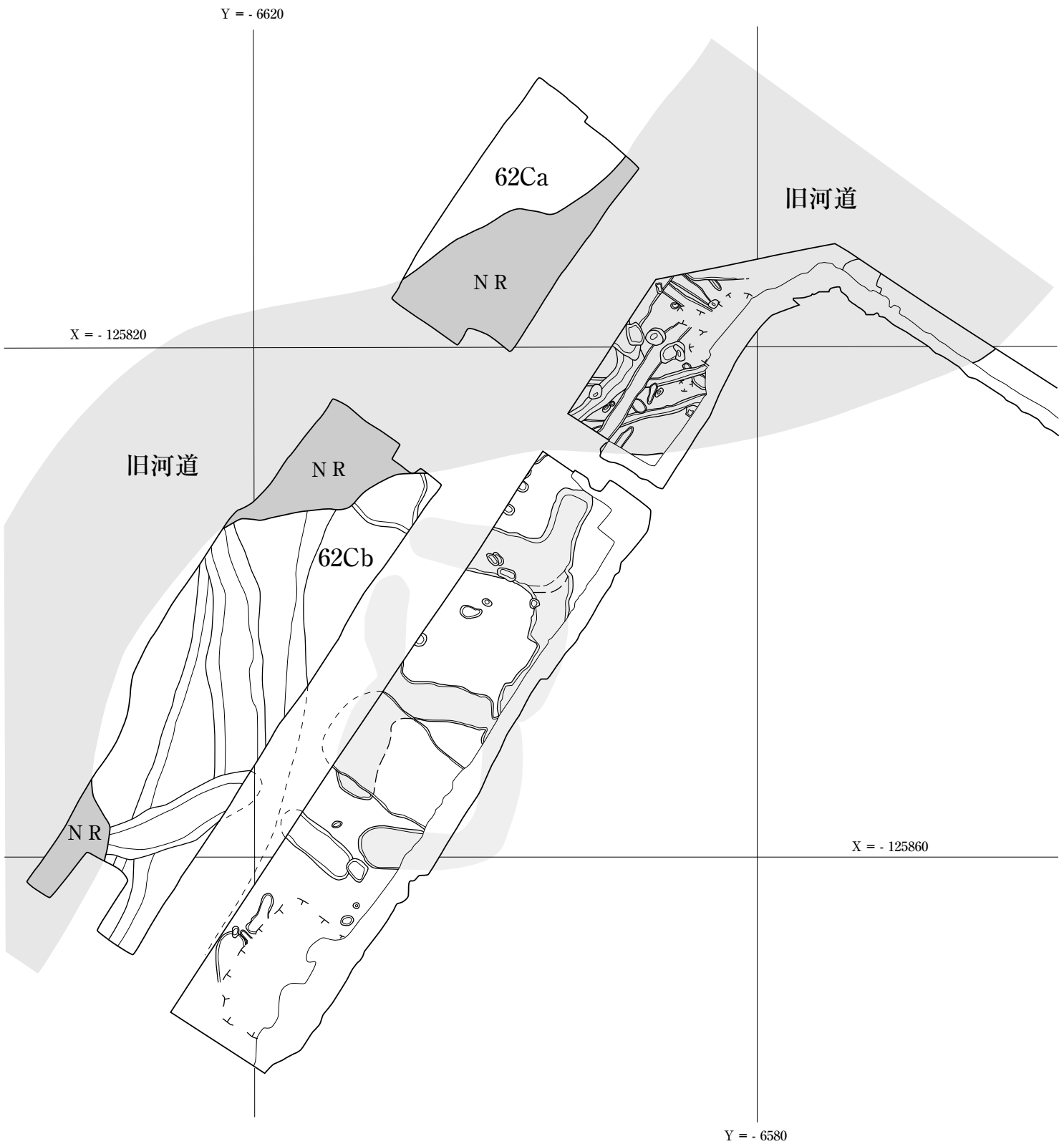
B遺構群は、L字形調査区のコーナー周辺に展開する。遺構は自然流路が埋没した後に、小規模な溝と土坑が複雑に切り合っただけ掘削されており、古墳時代中期と思われる甕1点以外は時期を判定し得る遺物はほとんど含まれていなかった。この自然流路は、第37図に示すように隣接する62Ca・62Cbといった過去の調査区でも検出されており、この地を蛇行しながら流れていたものが遅くとも古墳時代中期までに埋没した後、小規模な溝、土坑がこの地点に繰り返し掘削されたことがわかる。

C遺構群は、調査区の東端に展開するが、小規模な溝、土坑が集中し、今回の調査区ではこの部分においてのみ弥生時代中期中葉の遺構が確認できた。湧水層の深度から、十分に掘り下げた調査ができなかったことは否めないが、この地点には今回の調査区内で最も古い時期の遺構が集中していることは明らかである。

上層遺構では、少ないながら土坑、溝、杭列等が検出された。この中では、SD 01 から近世後期の土人形片が出土しており、遺構の機能した時期がうかがえるものであった。この溝は、検出面において推定幅が2.4m以上、深さ0.54mの比較的しっかりした規模で、水利機能を目的としたものと考えられる。

時期解釈

これまでの岡島遺跡における調査成果では、弥生時代は中期初頭から後期まで数量的な差は認められるものの、各時期の遺物が報告されてきた。今回の調査区では、中期中葉の



第38図 旧河道・方形周溝墓想定図 (1/250)

いわゆる瓜郷式として捉えられる時期から、後期末または古墳時代初頭の欠山式として捉えられる時期までが認められた。調査地点における出土遺物の形態的特徴からは、中期中葉と中期末の2時期が比較的まとまりをみせており、過去の調査結果とも整合した。

新たな知見としては、今回の調査地点で面として捉えた上層遺構が、近世後期までに掘削された可能性を知ることができたことである。調査地点付近は、近世時に度重なる水害を受けたことが記録によって知られているが、今回の調査で当該期の安定した溝を検出できたことは、土地利用のされ方を探る上で好資料となるであろう。

「岡島」像

西尾市史による推定遺跡範囲は、昭和28年の用排水路床下げ作業において土器採集された地点により、東西約1.5km、南北約1kmとされている。第38図において、北東より南西にのびる用排水路のなかで、市史掲載試掘地点●印が4ヶ所近接する部分では、弥生時代中期の瓜郷、長床式土器が最も多く採集されたとされている。その後、西尾市教育委員会による昭和52年の調査においても、竪穴式住居を含む弥生時代中期の遺構が顕著であった地点は、昭和28年に多くの土器が採集された地点周辺の調査区であった。

江原町東の交差点を中心とした県道部分の調査では、昭和62・63年、平成10年に当センターが調査を行った地点において蛇行する旧河道が検出され、この東側では平成9年の西尾市教育委員会調査地点も含めて、方形周溝墓または土器棺墓が確認されている。旧河道の西側では、西尾市教育委員会の昭和52年調査において人為的な痕跡が稀薄であることが確認されているため、岡島遺跡の範囲は旧河道よりも西側に密に展開することはないようである。この県道部分の調査では、北側において弥生時代中期中葉の方形周溝墓、中期末の竪穴式住居跡が検出され、南側において中期中葉の環濠とも考えられる溝、中期末～後期の方形周溝墓が検出されている。これは、時期を異にして居住域と墓域が入れ替わっているような検出状況であり、空間利用を想定する上で興味深い。

国道23号線バイパス部分の調査では、弥生時代中～後期の方形周溝墓、土器棺墓が多く検出されており、居住域を想起させるような遺構はほとんど検出されず、旧河道が複雑に入り込んでいる。したがって、岡島遺跡の範囲は、このバイパス部分より南側まで密に展開することはないようである。

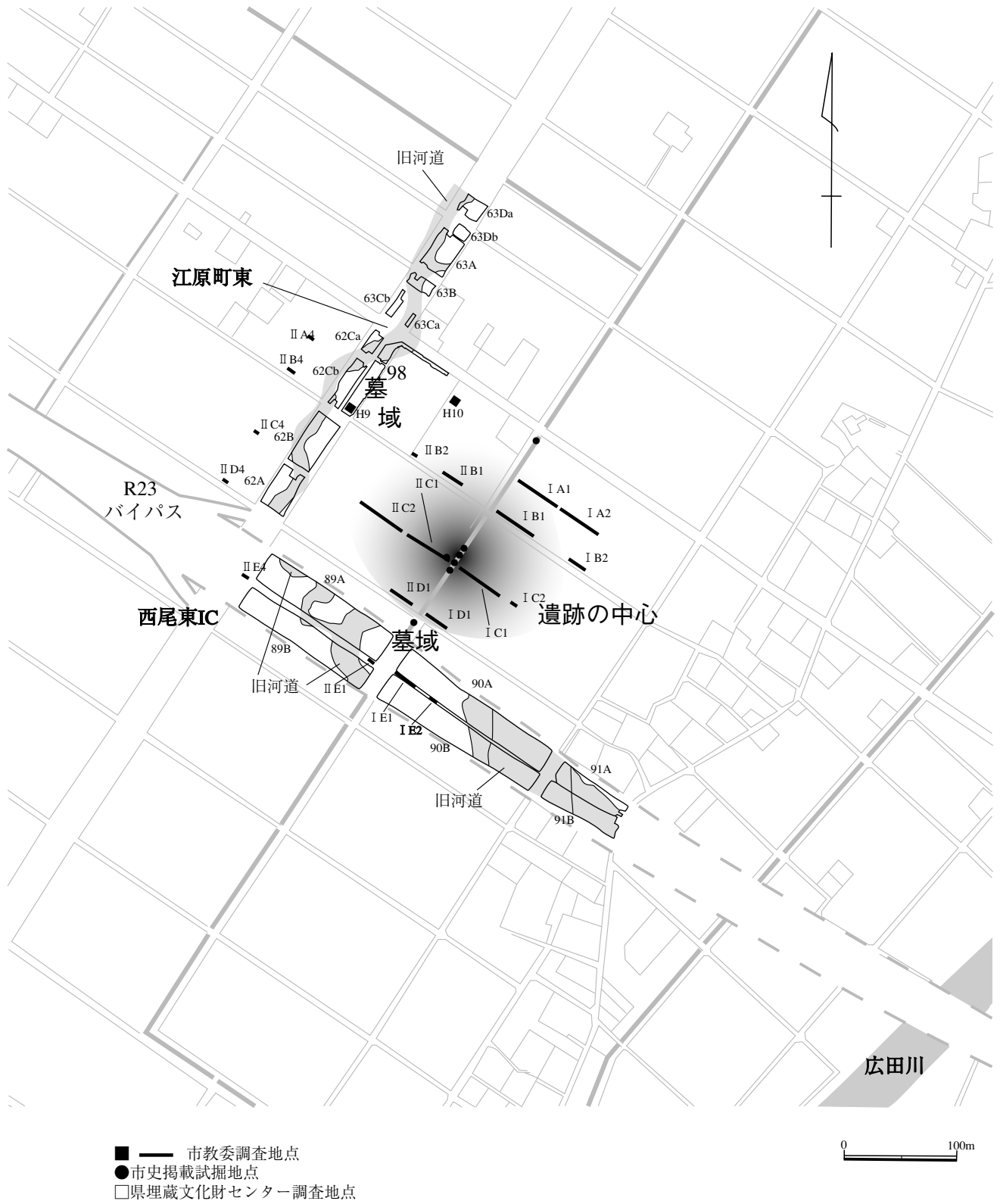
以上の調査事例から、岡島遺跡は弥生時代中～後期を主体に、旧河道の流路変更などの影響を受け、居住域・墓域を移動させながら展開した遺跡だと思われる。

結語

岡島遺跡の全調査事例は、遺跡全体像をうかがうにはほど遠いものであり、特に遺跡の中心を形成すると推定されている地点は、面的に広げて調査される機会をいまだに得ていない。遺跡全容の把握に向けて、各地点での調査事例の積み重ねがさらに必要であろう。

参考文献

- 池本正明編 1990 『岡島遺跡』 ・ 同編 1993 『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
 松井直樹・鈴木とよ江編 1994 『岡島遺跡』 西尾市教育委員会



第39図 岡島遺跡調査地点位置図 (1/5000)

圖版

図版目次

図版 1

- ① 調査区遠景（東より）
- ② 調査前風景（南東より）
- ③ 表土剥ぎ
- ④ S K 01断面（西より）
- ⑤ S K 02・03完掘状況（北より）
- ⑥ S K 04断面（南より）
- ⑦ S K 05断面（西より）

図版 2

- ① S K 04・05・06・07（南東より）
- ② S D 01断面（北東より）
- ③ S D 01全景（南より）
- ④ S A 01（北西より）
- ⑤ 調査区北西角（南東より）
- ⑥ C 遺構群（北西より）
- ⑦ 調査区北西角（北東より）

図版 3

- ① S K 101断面（北西より）
- ② S K 101遺物出土状況（北西より）
- ③ S K 102断面（西より）
- ④ S K 102遺物出土状況（西より）
- ⑤ S K 105遺物出土状況（西より）
- ⑥ S K 142遺物出土状況（南より）
- ⑦ S D 101断面（西より）
- ⑧ S D 102断面（北西より）

図版 4

- ① S D 104断面（北より）
- ② S D 104遺物出土状況（北西より）
- ③ S D 104遺物出土状況（北東より）
- ④ S D 108周辺（南東より）
- ⑤ S D 110断面（南西より）
- ⑥ S X 103遺物出土状況（北西より）
- ⑦ S U 101遺物出土状況（北西より）

図版 5

- ① 調査区東壁断面（南西より）
- ② C 遺構群付近作業風景
- ③ 調査区東側作業風景
- ④ 調査区全景（北東より）
- ⑤ 調査区全景（南西より）
- ⑥ 湧水層確認掘削

図版 6

遺物写真（1）

図版 7

遺物写真（2）

図版 8

遺物写真（3）

図版1



①調査区遠景(東より)



②調査前風景(南東より)



③表土剥ぎ



④SK01断面(西より)



⑤SK02・03完掘状況(北より)



⑥SK04断面(南より)



⑦SK05断面(西より)



①SK04・05・06・07 (南東より)



②SD01断面 (北東より)



③SD01全景 (南より)



④SA01 (北西より)



⑤調査区北西角 (南東より)

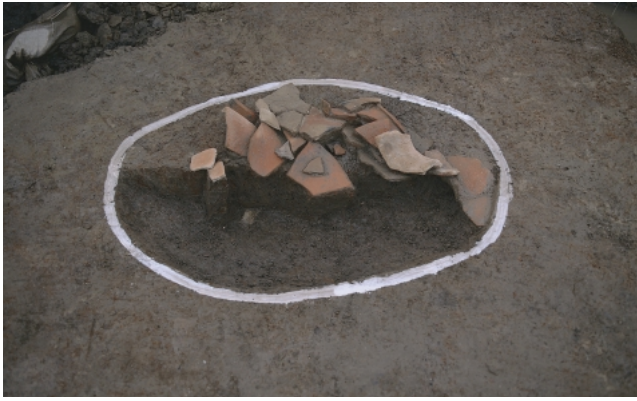


⑥C遺構群 (北西より)



⑦調査区北西角 (北東より)

図版3



①SK101断面(北西より)



②SSK101遺物出土状況(北西より)



③SK102断面(西より)



④SK102遺物出土状況(西より)



⑤SK105遺物出土状況(西より)



⑥SK142遺物出土状況(南より)



⑦SD101断面(西より)



⑧SD102断面(北西より)



①SD104断面(北より)



⑦SU101遺物出土状況(北西より)



②SD104遺物出土状況(北西より)



③SD104遺物出土状況(北東より)



④SD108周辺(南東より)



⑤SD110断面(南西より)



⑥SX103遺物出土状況(北西より)

図版5



①調査区東壁断面(南西より)



④調査区全景(北東より)



②C遺構群付近作業風景



⑤調査区全景(南西より)



③調査区東側作業風景



⑥湧水層確認堀削



图版7



